
無表情王子と妃候補の偽り姫

konakusa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無表情王子と妃候補の偽り姫

【Nコード】

N9376T

【作者名】

konakusa

【あらすじ】

カサリア王国第一王女リーナ別名【悲劇の王女】は隣国である大
国アデイル帝国の妃候補と呼ばれた
そこにいる【無表情王子】ことヴェザイン第一王子。二人の出会い
は微妙な形から始まる

【悲劇の王女】と【無表情王子】が送る物語

プロローグ(前書き)

うまく書けないと思いますが暇つぶしにちょっとでも見ていただけると嬉しいです

プロローグ

とある世界にカサリア王国と呼ばれる国がありました、カサリア王国の王様は国民のための政治を！を目標に政治をしているため国民から愛されています、さて今回の物語の中心的存在はそんな愛され王ではなくその子供達・・・の中の一人です。

カサリア王国の王女王子は下から二女のカーリナ（11）、次に長男のザエリス（12）、最後に長女のリーナ（17）です。

下のカーリナとザエリスは、大変リーナに懐いていて片時もリーナから離れようとしません、歳が離れているからかも知れませんが。

そんな第一王女リーナは、巷ではのんびり者の鈍感王女として有名です。今年行われた格闘競技大会で優勝者に王女から直々に優勝カップを受けとるさいに、優勝者である王宮騎士団隊長であったサークスが王女に告白をしたのです。「好きです！！」と、大声で叫んだところリーナ王女は「まあまあ、好きなんですか？」となかなかの好感触しかし「は、はい！！」「フフ、そうなんですか」「はい！！」「いいですよ」おおっと！？まさかの次期国王決定か？と国民が見守る中話は進んでいきます。「ほ、ほんとでありますか」「だってあなたが今年の優勝者なんですもの」「。。。は？」「。。。この時闘技場に来ていた市民の皆さんも同じ言葉が出たそうです。

「さ、優勝カップです」「え、え、リーナ様？」「ふふ、でもこんな大声で優勝カップが好きだなんていつたら笑われちゃいますよ？」

「り、リーナさまー」と、まあこんな感じで全国民の前で盛大に告白したにも関わらず勘違いで告白と気がついてもらえず、次の日に団長室には国民から大量の慰み品が届けられたらしい。哀れ団長さんそしてこの事例があと何十件もあるということ、巷いや国民は皆この王女を【悲劇の王女】と呼んでいる、別に王女が悲劇に会っているのではなくその回りの男供が悲劇に会っているというのがこの名前の由来である。

リーナはモテる、本人は自覚ゼロだが一年間の告白回数か四桁を越えたこともあるぐらいだ、それだけリーナが美人だと思う人が多いだろう。しかしリーナの容姿は平均的で平凡だ、別に絶世の美女というわけでもすばらしい力がある理由でもない、化粧をするとなかなかの美人になるのだが……。彼女はモテる、理由は分からないが多分王族なのに誰にでも分け隔てなく接する性格のせいだろうと思われる。

そんな彼女にある時一つの手紙が届けられた、送ってきたのは王国の隣にある大国アデル帝国だった、そんな大国からの手紙の内容はカサリア王国の隣にあるアデル帝国の第一継承者のヴィザイン王子の妃候補として、カサリア王国第一王女リーナ姫に来てほしいという内容だった、リーナも一様は王族である、したがって国のために嫁がないといけないだろう。これをいい機会だと思った王様はこれに承諾しリーナを帝国に嫁がせることに決定をした。リーナもこのことに不満はなくすんなりとリーナの帝国に行くことになった、まあこれに反対した者もいてそれがリーナの下のカリーナとザエリスである、帝国に行く二日前に二人揃ってリーナの所にお仕掛け行かないでと泣いて訴えたらしい、されどもすでに帝国に行くのを固く決意していたリーナにはいっさい通じず最後には「二人共私達は王族よ？王族は国のために尽くさなきゃ、それにね私がどこかに行つたとしても二人のお姉ちゃんであることには代わりわれないから大丈夫よ。明後日には帝国に行つちゃうけど最後は笑顔で送ってほしいな、それに一週間もすればまた会えるから」と笑顔で言われてしまい二人はただただ泣いた。なんとすばらしき姉弟愛？ そんなこんなで兄妹二人の説得が終わりリーナは出発するまでの間帝国に連れていく自分の使用人を決めることになり、長年ともに過ごしてきたリーナ専属のメイドであるソフィアと共に後日帝国に向け出発することになった。

プロローグ（後書き）

文章改正しました、内容はまったく変わりません

リーナとは……？（前書き）

暇つぶしに見てくれるとうれしいです、なにか変な箇所など見つければ指摘してくださいとありがたいです。

リーナとは……？

仏教だかどつかだかの宗教では古来より輪廻転生というものが信じられてきた、魂は肉体から離れ天に上り魂を浄化しまた世界へと送り出す。

転生する場所や生き物はばらばらで人間の時の場合もあればアリの時の場合もありうる、でも生まれ変わる時ってほとんど記憶なんて無くなってるわよね？ 新しい人生で前世の記憶なんてあつたらラッキーと思う人も居るかもしれないけど、たぶん少ししたら前世の記憶が邪魔になる。

邪魔なんて悪い言い方もかもしれないけど、これは本当のことだ。だって私はいつも前世の記憶なんて忘れたいと思っているんだもの

……

私、カサリア王国第一王女には「橘 衣佐奈」として生きた人生があつた、生きたのはたつたの17年だったのだけれど最後の私の死は交通事故だった、いまでも鮮明に思い出せる。早く忘れたいのだけで何故かたまに夢にでてくるのだ。

そんな私は死んだあと、知らない内に変な一面白色の部屋の中にいた。そこにはこれまた変な髭を長く伸ばしたよぼよぼなお爺さんがいたんだ。

そのお爺さんは第一に私に向かって儂は神だと言い始めた、日頃から老人と接する機会が多かった私は、このお爺さんはボケているんだなあと思つたのは悪くないと思う。というよりそれが普通の反応だろう

まあそれは置いて、そのお爺さんは私に「お前が死ぬのは予想外だった、すまんけどもう一度人生やり直してくれない？」と言い始めた。う〜んどこかでよく書かれる言葉だね〜

その時にはさすがに私も目が覚めて記憶が戻り自分が死んだことを悟った。

こんなテンプレ物の小説や漫画が大好きだった私は普通の人よりもなんとかこの神様のお爺さんの言葉を理解することに成功した。

神様のお爺さんは「お前には次の人生を楽しんでもらえるように絶世の美女と言う形で生まれるようにさせたからの」「フォホツホと得意気に喋る神様、絶世の美人……誘拐・陸辱・政略結婚・不幸な人生……あれ？それって逆に危ない目に合いやすいのでは？

「すいませんけど外見は普通でお願いします、厄介事に巻き込まれたくないんで」と言うのと神様のお爺さんは目を丸くし困ったように長い髭に触りながら「すまんがそれはちと無理だ、もう変更はきかんのじゃよ」

申し訳なさそうな顔をした老人、見ているこっちが何だか悪い気がした。たぶんお爺さんもまさか美人止めてください！なんて言われるとは想像してなかったんだろうけど……脳裏に浮かんでくるのは最悪な結末

変更はきかない……「じゃあ新しく能力でも追加出来ないかしら？」

「能力のお、出来んこともないが……どんな能力を？」

「変身なんか出来る能力が欲しいの！！ そうすれば生まれた直後に能力で平凡なスタイルに出きるしね。」そうすれば少しはマシになるはずだ！！私は普通の人生を送りたいんだよ

その願いは通り神様から変身能力をもらった私は第二の人生を王国の王族長女として送ることになった。でも王族って面倒ごとの中心にいるのでは？

リーナとは……？（後書き）

文章改正しました、内容は変わっていません

無表情王子

リーナの帝国行きが知らされたのと同時刻の事

「お！！この子かわいい、兄貴この子にしなよ、この子」

「しかし、この姫は性格がよろしくないと評判ですよザリーア様」

「性格が悪いか、会ってみなくては分からないが、一応却下だな」

「そうですよ、綺麗な薔薇には刺があるって言いますしね」

「お前ら……」

とある一室で三人の男が机に置いてある大量の資料を見ながら話している所だ

端から見れば、何だこいつら？と言いたくなるような会話にも聞こえなくもない

それを肯定するように一人の男が飽きたような声で残りの二人に話しかける

「兄貴、そろそろ乗り気になれつて。兄貴の奥さん決めなんだし」

「そうですよ王子、国のためでもあるし王子のためでもあるんですから。それにその無表情な顔は止めてください、明後日には国中の姫達がこの城に来るんですからその顔をされては不気味です」

一人乗り気ではないような口ぶりをする男に残りの二人はその男を牽制する

「俺がいつているのは（そんなことではなく、そんな資料の写真か

らでも噂だけあったこともない相手をそんな風に言うのは止めると言うことだ)……あまり言い過ぎないことだ」

「確かになあ、今回集まってもらった姫の中に兄貴の妃に相應しい奴がいるかもわからないし」

「あ、いや……(いかん、なんで俺はこの二人に話しかけると自分の言葉を端折って話してしまうんだ)」

「少々こちらで騒ぎ立てすぎましたね、帝国の次期妃ともなればそれなりの権力を手に入れられる訳ですし」

男の言葉にすこし考え直す二人、その男たちを見ている男、名をヴェザイン「アデイル」。

今回リーナが帝国に行く理由ともなった男だ、身長は182cmで銀の髪と銀の瞳を持った男だ。西洋風な顔立ちでしかもとびきりの美形、しかし彼は今までの会話で一度も表情を変えておらず一見人形のような雰囲気をしている男。年齢は18歳

次にヴェザインを兄貴と言っていた男、名前をザリーア「アデイル」。ヴェザインの実の弟だ、そして今回の妃候補を集めたのもこの男でもある、慎重は178cmで銀の髪と瞳をしている。この銀の髪と瞳はアデイルの王族特有の色だ。顔はヴェザインに負けも劣らずの美形、年齢は16歳。

最後にヴェザインを王子と言う男、名前をサエル「カタール」と言う、年齢もヴェザインと同じ18歳で幼なじみでもある。彼は帝国四大侯爵の一人だ。髪は茶色で瞳は黒で東洋系の顔をしている

「違う(俺が言いたいのはそんなことじゃない!!それに相應しいかどうかでとやかく言われたくない、最後に俺一回も結婚したいなんていってない!!)……分かったか?」

「了解です!!全力で王子に相應しい姫君を見つけます」

「兄貴、やっぱ帝国の次期王ともなればそれぐらいの威厳が必要なんだな。感動したよ」

「何を言っている（話が繋がらないじゃないか）……下げれ」
「ハッ」

ヴェザインの言葉に二人は部屋から出て残されたヴェザイン王子は、大量の資料を見るとため息と共に不安や期待感が高まってくるのを感じていた。

次期帝国王である第一王子ヴェザインは巷では愛想のない王子として有名である、帝国誕生の記念パレードが伝統行事として毎年行われるが国民は一度たりとも笑ったヴェザイン王子を見たことがないらしい。極めつけに彼は今年行われたパレードの最後で、国民に次期国王として宣言した時「次期国王は……俺だ」と、まさかの10文字しか喋らなかつたのである。歴代の次期国王を宣言する時の王は皆約一時間はしゃべり続けすこし照れくさそうに喋る者が多かつたらしい、ヴェザインは一時間どころか10秒も喋らず次期国王宣言をだし照れくさい顔どころか、照れくささも見せないくらい淡々と宣言を国民に向け宣言した。

この後国民からは反発の意見が大変多く出たが、ヴェザインは一行に気にした様子もなく、国民はこいつが国王になつたら暴君になるのではないかと心配したらしい。
しかし日に日につれて国民のヴェザインの見る態度が180°変わっていく。

ヴェザインは国民に国王宣言を出して以来度々政治に介入し国民の生活を豊にしていく提案をだし始めたのである。今でこそあるがヴェザインの提案で帝国全土に道路が作られ物の流通が盛んに行われるようになったり、これまた帝国全土に水道が作られ国民は生きにくいなかで大切な水をいつでも飲めるようになった。

そんなこともありヴェザインは国民から認められ次第に「無表情王

子「と呼ばれるようになった。」

無表情王子（後書き）

文章改正しました、内容は変わっていません

一日目 ソフィアは……

カサリア王国からアデイル帝国に入るために私たちは険しい山々を越えなければならない。

車輪が石に当たるとものすつごく揺れる、普通に走っていてもかなりゆれる。

ガタゴトと揺れる体、たまに体が浮くこともあるくらいだ。

馬車にはクッションではなく布切れの台座、だから馬車って嫌なのよ

「なんで馬車ってこんなに揺れるの？」

「まあしょうがないですよ、馬車なんですから（ニコ）」

私の独り言に笑顔で答えてくれたのが、私の前に座っているメイドさんだ。

名前をソフィアで私の世話係兼護衛兼親友兼幼なじみの女の子だ。なんて長い名義だろうか

彼女とはかれこれ、15年もの付き合いになる。

初めて会ったのが二歳のころだったから、ある意味私達は自分たちのことを知り尽くしていると言っても、いいかもしれない

「でも、これは酔うかも」

「リー？ここで吐かないでね、気持ち悪いから（ニコ）」

でもなんだかそのお陰か、たまにフィーが酷いことを言うのよね

「何気に酷いこと言うなあフィーは」

でもなんだか許せちゃうんだよね

まあ私達は長年一緒にいるのでもう姉妹のようなものなんですよ、だから他の人がいない時にはそれぞれ愛称で呼んでるの。

ついでに姉妹ではわ・た・しがお姉さんだから、なんとって私の方が生まれるのが早かったしさつきだって私の方が馬車に乗るのが早かったしそれから・・・

「出来の悪い妹を持つお姉さんの気持ちを少しは理解してもらいたいものだわ」

「だれがお姉さん？私がお姉さんよ！！」

「帝国まではあと10時間もかかるわ、着いたらすぐに離宮にむかわなくてはいけないから今のうちに寝てしまいなさい」

「無視ですか！！スルーですか！！」

「今から私は寝るけど安眠妨害したら……」

睨みつけてくるフィーを尻目に見ながら思った

なんで私の方が立場的に下なんだ……と

フィーは何気に疲れていたらしくすぐに寝てしまい私はやることもない、フィーは多分昨日の内に両親と妹に別れの言葉を言いにつただろうな、行くのは一週間だけだけど

私は馬車が揺れているせいで寝ることも出来ず、これは拷問なんじゃないかってくらい追い詰められていた。

だめよりナ！、私は今年17になった乙女なの、いくら言葉だけといっても皆の前で吐いてはだめよ。

あ、あと3時間だ、3時間さえ立てばこの苦しみから開放される

んだ

馬車の外を眺めながら自分に言い聞かせているリーナ

「さつきからブツブツうるさいですね」

「ヒツ、すいませ ……ンツプ」

殺気がすぐ前から受けて、見ると怖い怖いソフィアの笑顔がそこにはあった

ま、まずい、吐きそうだ

いえいえ、ソフィアの笑顔で吐きそうになっているわけではないですよ

ソフィアは美人さんですから見て吐きそうになるなんてありえませんが

「なに吐きそうになってるんですか気持ち悪いですよ」

「フィー、私を眠らせて。そうすれば吐かずにすみそうなの」

フィーなら睡眠薬ぐらい常備しているでしょう？

どこかの便利ロボットのようにな、ポケットとかにいれているよね？ フィーは優秀なもの

「ハアー、分かりました。眠らせればいいんですね？」

「ええ」

フィーがポケットの中を探り始めたので、多分薬を取り出そうとしているのだなあと思った……私は今ほど自分の言葉に後悔したことはないだろう

「ねえフィー？それは何」

「これですか？」

棒のような物をフィーは持っています、私はそれをどこかで見ることがありました。

そう、たしか・・・

「これは魔法のステッキと言って、これを人の肌当てスイッチを押すとあら不思議一瞬にして相手を気絶もとい眠らせることが……」
「フィーにそんな物必要ないでしょう！！王宮では災厄の魔女なんて言われているフィーには」

少しの沈黙のあと、フィーはニヤリと笑いながら私にそれを押し当ててきます。

思いだした！！ 確か王宮でソフィアの同僚がどこかの官僚に抱きつかれていた時にソフィアが同じようなので官僚にそれを押し当ててて……そして

「まさかそれをやるきじゃないよ・・・ね？」

痛いのは後免よ、なんでフィーがスタンガンなんて持ってるのよ！！

私の頭には気絶している官僚を池に放り投げているソフィアが浮かんでいた

「おやすみなさい」

「キャーーーーー」

最近フィーが怖くなりました

一 目 目 ソフィアは……（後書き）

文章改正しました、内容は変わっていません

二日目 気がつけばもう・・・

「はれ？こっちは」

なんだかよくわからないけど、私はベットで寝ている。おかしい何も覚えていない。

ちよつと記憶が混乱しているからかなと思ったが、どうやっても馬車でフィーに襲われて（あれは絶対襲われたって言う方があってる）からの記憶がない。ということはこの部屋にくるまで私は寝ていた（気絶していた）と言うことだ。

「フィー、恐ろしい子」

さすがは災厄の魔女って異名をもっているわけだ

「ちよつと電力を上げすぎただけよ、恐ろしいなんて人間きが悪い」

こっちはフィーのいきなりの登場で心臓が悪い

というか、なんでフィーが私の隣にいるの？ まったく気がつきませんでしたけど・・・

「これくらい出来なければメイドは勤まりませんから、気配を消すのはメイドの第一段階です」

「すべてのメイドさんがそんなこと出来たらもはやメイドではないわよね」

メイドさんが皆そんなだったら私はメイド改めアサシンと名づ

けるよ

メイド長に進言してみても、いいかもしれない

「それはいいかもしれませんが」

勝手に心を読まないでいただきたいアサシンよ

「まあ冗談は置いていて、そろそろ起きてくれませんか？朝食の用意が出来ておりますので」

「朝食？」

「なんの冗談だいフィー、離宮に着くのはお昼ごろだったと思ったけど」

「すみません、魔法スチックもといスタンガンの電気出力をすこし間違えてしまいました」

「……………」

今度メイド変えよう、主人を脅すメイドなんていやだ！

照れてエへって顔でそんな怖いこと言われたのは生まれて初めてかもしれない

そのあと朝食をとった私は、王宮から持ってきた荷物を出し部屋をアレンジしていく。

部屋は二人くらい余裕で住めるほどの大きさで、荷物の量が少なかつた私は衣類などクローゼットに簡単に入れることができ（なぜか部屋にはクローゼットが5つほどある）暇つぶしのために持ってきた本（自作の恋愛ものやテンプレもの）やトランプなど、それぞれ

れ手に届く所に置いておく。

この世界は日本のように暇つぶしの物が圧倒的に少なく、だいたいは自作で作るしか小説やトランプなどの大人数で楽しむものや静に一人でやることがない。

ちよつと恥ずかしいが自分が書いた小説などを出したりしてちよつとしたお小遣い稼ぎもしている。

もちろん、私の実名は公表してないけど

「リー？聞いてますか」

「ん？聞いてなかった」

なんか言ってたのか

手になにかメモ帳を紐解いて説明しているようだった

「もう一度いいますね？今度聞いてなかったらまた魔法の……」

「了解であります！！」

お父様、最近メイドさんが脅迫紛いなことをしてきます

しかも目がありえないくらい怖いんですけど

「今日の夜に帝国主催の歓迎パーティーが行われます、分かっているかと思いますがこのパーティーは将来妃になるかもしれない姫君のお披露目パーティーでもありますので、リーには私が選んだドレスを着て出ていただきます」

ドレスかぁ、あれってキツイから私キライなんだよな

「これから一週間は気が抜けない日々になるかと思いますが、リーは私が守るので安心してね」

ニコッと笑うフィー、なんか照れるなこついうの
私としては好きな人に言われるのが夢だけどね

「で、今回帝国に来た理由であるヴェザイン王子についてですが」

フィー曰く、ヴェザイン王子は謙虚な方で無口であり感情を表に出さない性格らしい。

巷では「無表情王子」と呼ばれてるんだって。王子なんだからもつとかつこいい頼り甲斐のある呼ばれ方の方が、いいと思うんだけどな（あなたも【悲劇の王女】って呼ばれますよ）王子と言えば私の弟しか知らないから他国の王子って見てみたいかも、弟は母性本能を引き立てるようなかわいい性格だけど、この国の王子って無表情王子って呼ばれているくらいだからもの静かな性格なんだろうかと、期待で一杯です

「聞いてますかリーー!!」

「聞いてるってばあ」

だからスタンガン片手に私を脅さないでよ!!

二 目 気がつけばもう・・・(後書き)

文章改正しました、内容は変わっていません

ドレスはキツイのです(前書き)

王子と姫がまだ会ってませんね……

ドレスはキツイのです

夜のパーティーには王子を初め帝国の王や有力な貴族など、様々な人が来るらしい。

お披露目としてのパーティーではあるが、それ以外に貴族が次期王妃となるかもしれない姫に対しご機嫌取り。

つまり王妃になった場合の自分の立場をよくしれくれよとの密約の場でもある。

そのため貴族は事前に姫たちの資料を見て、有力候補を決めパーティーの時間帯はの姫にべったりとひつついてもらいたい。

姫達も姫たちで有力貴族達に自分が有利になるように王子に進言してくるよう頼むそうだ。

なんともまあドロドロしたパーティーなこと……

「リーに似合うドレスってなかなかないのよね」

「これはどう？胸の部分が分かれて後ろが露出してるの」

「胸とかあまりないから返って微妙になるんですよ」

「うっ！！」

なんとも痛い所をついてくる幼なじみだ

そのドロドロパーティー（なんかエロい）に出る私はただいまフイーと共にどのドレスを着ていくかを口論している所なんです。

私は身長160cmバストが自分なりにBだと思ってるんで（実際はA）胸が開いている奴？なんていうのかわかんないけど、それを着ていこうと言うとフイーがそんなの似合わないと言いだめた。

胸が……胸さえあれば

自分の胸を見ているとなんだか虚しくなってくる

「それにリーには白とか似合いませんよ、似合うなら赤いや黒か」

「真逆の色だよそれ……！」

どっちにしる私にはドレスが似合わないと言いたいでしょフイーは

「まったく……リーが変身を解いてくれれば選びやすいと言うものを」

「それはいや、だってこっちの顔の方が馴染んじやってるから。変身解いて鏡みたら誰これ……って思っちゃうもの」

長年この顔でいると、地味顔でも愛着がわくものよ

まあ、愛着のも当然の顔なんだけどね

「それに胸と身長は変身といっても変わらないし」

胸と身長は変身を解いたときのために変身していない姿と同じにしてある

どちらにしる私は貧乳ってことなんだよね、いいよ別に！ 最近貧乳萌とかあるし！

「分かってはいましたけど、もう少し胸いやバストがあれば……」
「どっちも同じだよ……！ 言い直さないで」

地味に痛い攻撃だよ

そりゃあソフィアはいいよね、見た感じEくらいなんだよ

「ささ、早くしましよ。ドレスを選んだらお化粧をしなくては
けませんし」

「面倒なことは早く終わってほしいわ」

今回呼ばれた国の姫は20人いるみたいで、一週間王子はその二
十人の姫と交流を深め王子が気に入った8人を選びそれ以外は国へ
帰ることになる。

実際は国王と皇帝と公爵家も選ぶそうだけど。

国には一週間後に一度全員帰るんだけどその後選ばれた姫だけに
帝国から招待状が届くのだ。

私は直接王子と会ったことはないが王子はかなりの美形らしい。

他国の姫から人気が高いらしいし、それに加え次期帝国の王でもあ
るため優良物件である。

私としてはやさしい人なら誰でもいいんだけど私この歳にして
一回も告白されたことないからなあ、やっぱり地味顔だからか。初
めの選択間違えたかなあ……

ちょっと落ち込むリーナの姿に飽きれながらそれを見ているソフ

イア

端から見たら姉妹に見えなくもないこの二人

ドレスはキツイのです（後書き）

文章すこし改正しました。内容は変わっていません

夜のパーティー (前書き)

誤字脱字などあれば指摘してくださいとありがたいです。

夜のパーティー

「き、緊張してきた」

「大丈夫ですよ、いつもと同じニヤケ顔です」

「それはまずいんだよ!!」

あつという間にドレスは決まり（結局は赤と白の柄のドレスとなった）湯浴みをして化粧と、なんともハードなことでドレスに着替えるまで2時間もかかってしまった。

なんだかんだいってファイは張りきっているらしく化粧に1時間もかけた、本人曰く「女性は本来1時間以上は化粧をするもの」らしい、私なんかいつも5分程度のかるい化粧しかないからよくわかんない。

パーティーの入場は始まってから30分以内に入場すればいいらしい、入場時間は自由なのだ。

しかし王子は初めから会場にいるため、多くの姫たちは始まってから1分も立たずに入場するらしいが、私はドレスの試着などゴタゴタしてパーティー開始25分を過ぎたときに、ようやく支度が整い入場しようとしている。

ファイは、はりきったがため開始早々にいけなかったことをすこし悔いている。

そんなに気にしなくてもいいのにね。

『カサリア王国第一王女リーナ様ご入来!!』

扉の前に（高さ5メートルはあるであろうくらい超デカイ扉）立つと独りで扉（門？）が開き中にいた門番？らしい人が大声で叫ぶ。

私は一応はカサリア王国第一王女だったので国主催のパーティーなどに出たことがある。

だからこのような場にはなれているはずだったんだけど……き、緊張してきちゃった。

パーティーと言うのは、聞こえはいいがどこもかしこもドロドロパーティーだ。

貴族は上の者に媚びて上の者は優越感にしたるのである。

私の国でもそうだったようにどこの国のパーティーもそんな物ばかりだ、そんな中でも王族はいつも笑顔を絶やしてはならない。

私は日頃から努力はしているが、知らない間にニヤけ顔になっていくらしい。

日本人だったころの記憶があるため、ちょっと引込みガチな所もあるし、庶民の家だったのでこんなパーティーになれていなかったことも影響の一つであろう、できれば神様に記憶の消去もお願いしておきたかった。

「リーナ様、笑顔ですよ。ニヤけないでくださいね」

フィーの声で頭が覚める、フィーは人前だと私のことをリーナ様と切り替える。そのおかげもあって私自身も気持ちの切り替えができるのだ。

なんだかんだ言って私はソフィアに助けられてばかりなんだよな

中に入ると、そこはものすごく大きな部屋でたぶん体育館の二つ分はあるだろう。

テーブルがたくさん並べられておりそこにはおいしそうな料理の

数々、そしてだいたい200人はいるんじゃないか？　と言うほどの人々がいる。

全員この国や近隣諸国の重要人物たちなのだろう。内の国の人間は居るかな？

その人々の中央には、これはまた美人としか言いようのない女性達が一人の男を囲んでいた。

予想はつくがアレは帝国に来た姫君とこの国の第一王子だろう
なんだかハーレムみたいに見えるぞあれ

「あんなにギヤアギヤア騒がなくてもいいのに」

ぼそつとつぶやく私

「しかたありませんよ、帝国といえばこの世界有数の産業大国であり人口や食料、軍などさまざまな面で世界トップクラスですから、そしてその国を受け継ぐ王子ともなればねえ」

妃になったときの権力もものすごいか……なんで私なんかと呼ばれたんだろう

「私は権力なんてあまり気にしないんだけどな」

「変身してまで面倒ごとに巻き込まれたくないくらいですからね」

私は面倒ごとが嫌いなんだからしょうがないじゃない、今回だつてどうせ私は選ばれないだろうと思ったから出ただけだし

「こんな地味顔に惚れる男なんてあんまりいないと思うし」

「顔以外にも性格とかあるでしょうに、それに気がついていないよ
うだから言いたいと思いますけど……化粧をするとかわいいですよ
リーナ様？」

「……うそ」

変身していない時ほどではないがソフィアのお蔭か化粧をしている今のリーナは十分かわいい、本人はあまり自覚がないみたいだが

「普段は若干地味顔ですがこうして化粧をするとかわいいんですよ？」

「ちよつとおトイレに」

「フッフ、ご冗談を言わないでくださいな」

「ツグ……（大丈夫大丈夫、私は他の姫に比べたら劣るんだから）」

王子の回りにまるでアイドルの追っかけの状態である。

姫君はどれもみんな華やかでとても美しい姫が多い、王子っていないな

だけど……

「なんかさあ、ヴェザイン王子、ものすごく無表情なんですけど」「ええ、あんなに美しい姫君を前にしてもまだあんなに表情を変えずにいられるなんて。男色何でしょうか？」「あ、たしかにそれはありそうかも」

王子の知らないところでそんな会話をしている二人
とても不名誉なことを言われている王子です。

（ヴェザインSIDE）

今日は姫のお披露目パーティーだ、ちよつと緊張するな

俺はもう18だし女性に興味がないといったら嘘になる、何故か偶に男色かと聞かれることがあるが俺は女性が好きだと言ってもし

まいち信用してもらえない。

だから今回の妃候補決めは俺にとってとても喜ばしいことでもあった、初めはちょっと乗り気じゃなかったけど

王族ともなれば結婚は義務であり子孫を残すこともまた義務だ。だがこの方俺は告白と言うものをされたことがなく女性との交流もすくないので、うまく話せるか心配。

姫君は美しい方が多いらしいが、俺の姿を見たら皆幻滅しないだろうかと心配だ。

俺としてはやさしい女性との結婚が好ましいので妃にするなら外見より性格をちゃんと見たい。

今回呼ばれたのは20名の姫は一通り資料は呼んだがやっぱり直接会わなければよくわからんからな。

コンコンと、ドアを叩く音がした。

『ヴェザイン様、そろそろでございます』

さて行くか……

まあなんだ、今正直いつてもものすごくテンパってる。

目の前には絶世の美女が何人も俺の前に立って話しかけてきて、

ここは天国なんじゃないだろうか……

いかんいかん、王族がこんなことではな。

ここでよく姫達を見ることにすると皆ものすごく化粧が濃い、そんなに化粧をつけると本来の美しい顔が隠れるんじゃないか？と言いたい気分でもある。

そして香水の匂いも半端ないのである、すこし鼻が曲がりそうだがけどそんなこと言ったら相手が傷つくかもしれないから言わない方がいいだろう。

女性と言うのはみんなこの様な匂いなのか。

俺が匂いを我慢していると姫達から話し掛けはじめ

「ヴェザイン王子様？好きなことは何でしょうか？」

ニコッと笑うその姿に不覚にも少しドキッとしてしまうが、まあなんだ、俺は嘘の笑顔というのがよく分かってその笑顔もまた嘘なのだと分かってしまった。

だが答えないわけにはいかず

「俺は…（そうだな、いつもは剣の稽古やら魔法の使い方やら政務の勉強を主にしているからその中で好きと叫びたら）剣術の習得だ」

会話を端折ってどうする俺！！テンパリ過ぎだろ

その瞬間まわりでザワザワとし始めた、やはり一国の王子が剣とは変なのだろうか。

まあまわりの姫たちは「なんて頼もしいお方なの」とうっとりしていたらしいが王子はそんなことにも気づかなかった。

ちよつとヴェザインが落ち込んでいると（しかし表情は無表情）扉の方から新たに姫が来たことを兵士が伝えた

遠くからゆらゆらと歩いてくる、すこし小柄な女性に俺は呆気にとられた、この大陸ではめずらしい黒の髪をさることながらすこし地味かもしれないがかわいらしい顔とうっすらと笑う表情。

姫はこちらに来ることはなかったが俺はその姫から目が離せずにいた。

なんだこの胸の高鳴りは・・・

彼女はカサリア王国第一王女リーナと言う名前らしい。

夜のパーティー
(後書き)

文章改正しました、内容は変わりません

夜のパーティー2

「ね、ねえソフィア？まだご飯食べちゃけないの」

「まだです、姫は必ずパーティーの間に帝国四大公爵と会わなくては いけませんから」

「さつきから胸が背中とくっつきそうなんだよ」

「もうくっついているようなものです、しかたありませんよ」

「ひっどー!!」

愚痴を言いつつこれも妃候補の仕事仕事と自分に言い聞かせる。

パーティーが始まって早1時間は経とうとしている。

相変わらず貴族達は、媚びを売ったり優越感に浸ったりとの会話を している。

中にはそうでもない人たちもいるが大半がそんな奴らばかり みたいだ。

他の姫たちは30分くらい王子にべったりとしたあと、自分に有利 な環境を作るべくはやばや有力貴族達の輪の中に入っている者もい た。

また逆に、話しかけられている姫もちらほらと見受けられている。

私の所には………どういうことか数人来た。

なんで来るんだよ、とちょっと喉のところで出掛かったがなんとか 止めて話を数分した程度だった。

私としてはご飯を食べて早くこの場を去りたくもあつたのだがいか んせん、このパーティーでは妃候補の姫には仕事があるのだ。

簡単に言えば帝国の最大公爵家である四大公爵の当主の挨拶だ、こ の帝国にとって公爵は皇帝と国王の次に発言権を持っている貴族で

あり国の大事な財政を担っている所でもある。

四大公爵、一人は北を担当するサードレアス家、南を担当するカンザイル家、東を担当するエルイス家、西を担当するカタール家である。

今の所リーナは二つの公爵の所をまわった所だ、しかし！！時刻は日本時間に直すと8時30分である。

リーナはまだ夕食をとっておらずさっきからお腹がグーグーとなっているようだ。

「だめ、もうだめソフィア。私はこれからお腹と背中が合わさって死んでしまうわ、お父様とお母様によろしく言うておいてね」

「面倒なんでこれ食べていてください」

リーナの発言に本当にメンドくさそうにしているソフィアは懐から（ポケットはありません）どこからかビスケットを取り出す（一枚だけ）

そんなソフィアの芸当を何度も見ているリーナは

「ソフィアは手品師にでもなりたいの？」

「いらないんですか？」

ソフィアがちよつと意地悪くビスケットを自分の口に運ぶ

「冗談です、あなたはメイドの鑑です。今度からスーパーメイドと呼ばせていただきますし……」

「あなたは誰ですか？スーパーメイドってかっこわるいですよ止めてください」

そう言いながらもフィーは回りに見えないように私の口にビスケットを運んでくれた、なんか恥ずかしいんだけど……

「ささ、はやく行きましょう。次はエルイス家当主様ですよ？」
「モグモグ、了解です」

しかし、ビスケツトだけじゃお腹いっぱいにならないよ

〈ヴェザインSIDE〉

なんでか俺はさっきからきになってしょうがない、なんだこの心の
動揺はいつたい

……いや、わかってはいるんだ。この原因は

「母上、なぜそのような格好なのですか」

「だってせつかくのヴェーちゃんのお奥さんお披露目パーティーじゃない。母親としてはどうしても気になったというか」

「なんでそんなのでウエディングドレスなのですか！！俺がどんなに恥ずかしかったと」

「ウツフフ、なんだか突然ヴェーちゃんに連れていかれたときは禁断の親子愛に！？かと思っちゃたわよ」

手を顔に当ててニコニコと笑う妙齡の女、いや母上。今年でもう40は越えようとしているにも関わらず未だに20代のボディを維持しつつけている自由きままな我が帝国の元王妃である。そしてただいま俺は本来は許されないが会場を出ている、このニコニコ笑顔の母親のせいで……
それにしても

「よく父上が許しましたね」

「フフ、実はあっちゃんにはこの姿は見せないようにがんばってパーティー会場にいったのよ」

あっちゃんと言うのは元国王であるアザイル、つまり俺の父上だ

「だとしたら俺がすぐさま母上を見つけたのは好都合でしたよ、あんな所であんな恰好をされたら……」

考えただけでも寒気がしてくる

「フッフ、私だってそれくらい考えてますっつてば」

エッヘンとばかりに自身に満ちた表情を浮かべる母上、ついでに名前がザリア

しかしこの母親にしてはちゃんと考えを持って行動しているとは進歩したんだな

「もし私だってバレたら逃げちゃえばいいんだから」

「根本的な解決でもなんでもないですよ!!」

なんなんだこの母は!!

「そ・れ・よ・り、ヴェーちゃんいい子見つかった」

「!?!」

「そっか、よかったよかった。ヴェーちゃんは男色じゃなかったんだね、もし男色だったら子孫も残せないからどうしようかと思ったし」

「母上!!あなたまで」

「男色だつて噂流した私の言葉が本当だつたらちよつと面白ろかつただけねど」

残念がる40には見えないヴェーザインの母親であるザリア

「噂流したの母上だったんですか！どつりで皆が私の弁解を聞いてくれなかったわけだ」

「で？で？誰なの誰なの、ヴェーちゃんの気になった子って」

「ウゲ」

「ささ、薄情なさい」

迫りくる母の言葉に先ほどのカサリア王国の王女を思い浮かべてしまっていた俺

やはりあの高鳴りは一目惚れなのだろうか？

夜のパーティー2（後書き）

ちよつと微妙かな？話が進みませんね

文章改正しました、内容は変わっていません

夜のパーティー3 西の公爵(前書き)

誤字脱字などありましたら指摘していただけるとありがたいです。

夜のパーティー3 西の公爵

「ようこそ我がアデイル帝国においでくださいました、カサリア王国第一王女リーナ様。私はこの帝国四大公爵の西の財政を担当しておりますカタール家当主でございます。」
「……こんにちは」

笑顔で話始めるカタール公爵

外見からして50は越えていると思われる

しかし何回目なんだろうか、この言葉を聞いたのは……

ようやく三人目の公爵の方に挨拶をし終わったころにようやく気がついたことがある

「我が帝国は……」

「ええ……」

毎度毎度帝国の歴史や文化についてやたらと話したがるのよ。

気がつかなかった私ははつきり言ってバカだとこの時には思ってしまった。

三人目の公爵の話が終わり次は最後までつと言うときに気がつきフイーに言った所、「今後リーナの勉強時間を倍にしたほうがいいのかしら？」と、言われてしまったほど。

だが、だがなんで公爵家はこつも帝国の自慢を話始めるんだよ！私はその間ずっと笑顔で話を聞いていなきゃいけないんだぞ（2分ほど）

言いたいんだけど、このような公の場での言葉は国際問題にまで発展してしまうことが多々あるのであまり強くは言えないのが現状

だ。さすがにもうビスケットだけではダメだ、お腹空いた〜
そんな状況の中助け船とばかりに話しかけてくる一人の青年が、
いや美青年がきた

「お父さん、そんな話は他の公爵の方が話しているでしょうに。それに姫をよく見てください、すこしお疲れの様子ですよ？」

彼は私の救世主じゃないかしら！！

彼の（多分公爵の息子さん）言葉を聞いた公爵はようやく私の方に意識を向けそしてあるうことが笑い始めたのである。

「ハハツハ、すまなかつたな姫殿。なにぶん公爵ともなれば貴族連中を相手にするときの対応ばかりであなたにも同じようなしゃべり方で話してしまった」

あゝ、それはちょっと納得です。貴族って他人と話す時は初めに自慢話から始まるからね、呆れ半分納得半分の私に先ほどの美青年が私の方に向き挨拶を始めた

「お初にお目にかかります、アデイル帝国四大公爵カタール家の次期当主になる予定でありますサエル」カタールであります。」

なんともお手本になる挨拶

好印象

「私はカサリア王国第一王女リーナでございます、この度アデイル帝国第一王子であるヴェザイン王子の妃候補として王国より来ました。」

完璧な受け答えに成功したぜ

「リー、ニヤけないで」

後ろからフィーの声が聞こえてくる、に、ニヤけてんの私！？やばいサエルさんが顔を引きたらせてる

「そ、そうですか。まあなんとというかこの一週間帝国を見ていってください」

「わかりました」

そそくさと当主さんとサエルさんは別の姫の所に向かっていった。
あ……まって

「失敗しちゃった……の？」

このニヤけ顔を今日ほど恨んだ日はないわ

「リーにしては上出来ですよ？」

そこは疑問ではなく普通に言っつてよ

〈サエルSIDE〉

僕の名前はサエル。カタール、お父さんがこの国の四大公爵の一人であるため王族とも密接な関係にあり、王族であるヴェザイン様とザリーア様とは幼いころから友に遊び学ぶことが多かった。

今回は妃候補のお披露目パーティーと言っつことで、公爵家の当主と次期当主は必ず参加せねばならないパーティーに出ることになっ

たのだが、俺が初めにビツクリしたのがあの王子がものすつごい綺麗な姫にまるでアイドルのように取り囲まれている所を目撃したことである。

王子は見るからに美形で女性にモテそうな容姿をしているが、生まれてこのかたヴェザインがあんなに女性に（しかもとびきりの美人）取り囲まれている所を見たことない。

まさにあれこそがハーレム状態なのであるうか？ん？ハーレムって何かだつて…？

最近話題のカサリア王国の作家が書いている「ハーレム野郎！！」って本に書いてあつただろうが。

まあそれはおいとこうか、ヴェザインが女性に取り囲まれていて一つ気がついたことがある。

「王子、すこしは照れている表情とかしてくださいよ……」

なんて言うか予想的中というか、やはり王子はずっと無表情のままであつた。

昔は素直に笑えたんですけどねえ……

そんな時急に王子が表情を変えた？いや王子のまわりのオーラが変わつた場面に出くわしたこともまた驚きでした。

オーラを変えたのはたしかカサリア王国リーナ姫の入場の時だったんです、リーナ姫が中に入った時に王子がちょうど良く彼女の方を向き、そのまま顔の位置を固定しつづつとリーナ姫の方を向いているのです。

何人かの姫たちはそのことに気がついたようで、リーナ姫に嫉妬と憎しみの目を向けていました……

僕としても、王子の表情を変えたリーナ姫が気になり声をかけようと探していると、家のお父さんがリーナ姫と話している最中で何か彼女はすこし困つた顔をしているみたいだった。

近づくとその理由が分かった、お父さんは普段貴族達を相手にす

ることが多いため帝国の自慢話をすることが多い、今回もそのよ
うな対応を事もあろうにリーナ姫にしていたのであった。

それに彼女は疲れているみたいでもあったのでここは一つ助けよ
うと父に声をかけた。

俺が挨拶をするとすこし呆気にとられているみたいなりリーナ姫は
気を取り直し彼女からも挨拶をしてくる、彼女をこの時リーナ姫を
よく見たが、顔は若干地味ではあるが珍しい色の髪をしているし貴
族の女性達がしているようなものすっごい匂いというより、うすい
香水の匂いに私は彼女に対する好感度を上げた。

と、そこでリーナ様の後ろでなにやら殺気じみた視線が向けられ
ているのが分かった。

先を見ると先ほどまでどこかに行っていた王子がこちらを見てい
た（睨みつけていた）、なんていうかこんな王子は初めてだ。

でもこれ以上王子の睨みを受けたくはないので私は彼女から撤退
することに。

「カサリア王国の悲劇の王女リーナか……面白いことになりそうだ」

一人つぶやく

夜のパーティー3 西の公爵（後書き）

文章改正しました、内容は変わっていません

夜のパーティー4 第二王子ザリア

ようやく公爵との挨拶も終わり、少し食べてからようやく部屋に戻ろうとした。

けれどもまだ帰ることはできないだろう。

理由は簡単だ、ただいま5人ほどの人に囲まれている状態だからである、王子じゃないよ？私だよ

王子みたいにアイドル的な感じの囲まれているならよかつたんだけどどちらつと相手を見ると目を細めてこちらを見つめ返している。

あきらかな敵意を感じるんだよ……私なにかやりましたかねえ

「これはこれはカサリア王国の悲劇の王女様じゃありませんか」

囲んでいる人の中で私と正面に立っている女性が話かけてくる

それにしても名前より先にその不名誉極まりない言葉をなげかけてくるとは……

私たち初対面ですよね？

「わたくしのことは存じておりました？」

「確かザートス皇国皇女のエスリナ様……でしたよね？」

まあなんだ……私、他の妃候補の姫達に囲まれているところですよ

二回目ですけどなにか悪いことでもしましたかねえ、そしてフィ

ー、さり気なく手に短剣を忍ばせないでよ怖いから

「ええ、そうですね。でもまさかあのカサリア王国の王女が今回来るとは思っていませんでしたわ」

あのつて、私他国の方々は何て呼ばれているんだろうか……
笑いながら話すエスリナさん、それにしても……Eかな？いやF
か、いいな胸でっかい 人つて、それにとびっきりの美女ときたら
非の打ち所がないね。ソフィアと同じだよ

「エスリナ様？我が主に向かってあのとは少し言葉が悪いのではあ
りませんか？」

おおう！？フィーから黒いオーラが、これはあれか、フィーの腹
黒い性格が具現化したのか？

「侍女風情がわたくしに向かって発言するとはなんとおこがましい」
「あのー！」

侍女風情って言い過ぎでしょ

「あなたの侍女は教育もちやんとしておりませんか？」

この人性格悪っ！！ちよつと今度の小説で悪人貴族のモデルにし
ようかな

「それより、リーナ姫？わたくしのヴェザイン様に変な視線を向け
ないでくださるかしら？」

なんか話がすつ飛んでますねえこの人は
ていうか、いつの間にあなたの物になっ たんですかヴェザイン様
は……

「あの……なんの話でしょうか？」

「あなたの視線でわたくしのヴェザイン様が汚れてしまっただけです、まったくなんてこんな地味な奴が妃候補の一人なんでしょうか？」

にこやかに（悪女の笑い顔）言ってくるエスリナさん。

ちよつと言い過ぎじゃあないかな？いくら温厚な私でもむかつくときくらいあるんですよ

私が言葉を変えそうとしたとき急に後ろから私の代わりに言ってくれた人がいた

「おいおい、ザートス皇国の皇女はそんな汚いしゃべり方をするのか？」

あなたも公の場でのしゃべり方では汚いですよ？

心の中で思いつつ後ろを振り向くと銀の髪と瞳が私の目の前に飛び込んできた、一瞬ヴェザイン王子かと思ったが違うことに気がつく
この人は……

「ザリーア王子……」

呆然と先ほどのエスリナさんの声とは思えないほどの小さな声が聞こえてきた

ザリーア王子？

「あつ！、第二王子さま……」

突然のヴェザイン王子の弟登場だ！！なんていうか運がいいんだな私は。ザリーア王子は初めて見るけど二人共西洋風な顔立ちなんだな、銀の髪と瞳にピッタリだよ

「あ、えつとザリーア王子、これはその」

エスリナさんを始め私を取り囲んでいた姫達が動揺している、なんたってヴェザイン王子の弟だからなあ。さっきの行動を見られてヴェザイン王子に報告でもされたら……って心境なんだろうけど

「あゝ、面倒からいい。それに兄貴には言わないどいてやるから」

さっさと消えろとばかりに話すザリーア王子

「そ、そうですか。……ではリーナ様またいつか」

最後にもう一度私を牽制しつつエスリナさんは4人の姫をつれて私の元を離れた。

でもああ言う人ってしつこいからなあ、ほんと面倒だわ。今回はそんな面倒な人を追い払ってくれたザリーア王子に感謝しなくてはね

「ザリーア王子さま、今回はありがとうございました」

素直に頭を下げる私にザリーア王子さまは何故か驚いた表情をしていた

そして何故か慌て出すと下を向きながら

「あ、いや別に、俺は自分の良かれと思ったことをしたまでだからな」

そうして、もう一度私の方に向き失礼したと言つと会場の中央に向かつて行った。

さすが王子様、心が広いなあ

〈ザリーアSIDE〉

今回俺が先頭に立って兄貴の妃候補を決めるために何人もの姫を集めた。

最初のころはあまり乗り気でなかった兄貴もあとわずかという所で、ようやく妃をとることに決心がついた様子で内心ホツとした。

まあ兄貴の妃、つまり奥さんを決めると言うことは俺もよく顔を合わすことがあるだろうから兄貴にはなるべく性格のよい人に決めてほしい。

とは言っても国の王族などの女性は大抵プライドが高く傍若無人な性格の者が多いのであまり期待しすぎない程度にしている。

お披露目パーティーの時も多分なにかあるだろうとは思ったが案の定、どこかの妃候補に選ばれた姫達がなにか争っている。

なんともまあ、性格はもつとなんとかならないのかなあと思うが今は心の中にしまっておこう。

そんな問題を起こしている姫たちの所に行こうとしたとき俺はあることに気がつく

「なんだ、集団で一人をいじめてんのか」

どこの貴族や王族も同じのようで集団で一人を追い詰める者が多いんだよ、今回ターゲットされているのはどうやらカサリア王国の王女のようなった。

でも数人で取り囲んで行く手を遮るとは、なんていうか幼稚だなと思う。

現に俺がそいつらに声をかけたら、その中心人物であろうザートス皇国の皇女は表情がすこし青ざめていた。

あんなに堂々と相手を囲んでいたら普通気がつくだろうに……
その中で驚いたことがあった、ザートス皇国の皇女…名前なんだ

っけ？、ああいいそいつイジメ？られていたカサリア王国の王女が頭まで下げたお礼を言ってきたのだ。

普通王族と言う者は傲慢な者が多く、人前というか人には頭を絶対に下げないものなんだが彼女は下げた。

顔は若干地味目ではあるが（たぶんそれでザートスの皇女にちよつかいだされていたんだろう）めずらしい髪の色と瞳をしていることに気がつき相手にたいして俺は動揺をしまい、あまつさえ言葉に動揺をのせて喋ってしまった。

ザートスの皇女にちよつかいを出されていたのにカサリアの王女は何故かニコニコとしていた、その事にも耐えきれなくなった俺は一時退却して兄貴の方に向かった。

性格いい人発見かもしれないな

「兄貴、どうだ？だれかいいい人でも見つかった？」

「お、お前まで（なんでそんなことばかり聞くんだよ、今聞くのは別に不自然ではないけど）、それよりザリア」

「ん？」

「その……どうやったら女性と喋れるんだ？」

「はあ！？」

顔に似合わず兄貴はへたれだったのか？

夜のパーティー4 第二王子ザリア（後書き）

文章改正しました、内容は変わっていません

三日目 暇の潰し方

朝起きると何とも豪華そうな部屋に私はいた。

普通の一般家庭にある一人部屋二つぶんはあるであろうくらいに広い部屋だった

床は高級そうな絨毯がしいてある

私が寝ているベットも高そうでなんだか高級ホテルにきているみたいだ

「というより、ここどこ？」

「いつまで寝ぼけているんですか？」

「ふえっ!？」

未だ起きて間もないため頭がボーとしている中ベットの横（しかも至近距離）から突然飽きたような声が聞こえた

見ると腕を腰に当てて少し怒ったような顔をしているソフィアの顔があった。

「いつまで寝れば気が済むの？もう9時すぎてるのよ」

まるでお母さんみたいだな

もしソフィアが母親になったら・・・子供たちも同じ性格になっちゃうのかな？

ちょっと心配かも

「フィーは将来立派なお母さんになるよ、でも子供は普通に育ててね？」

「私の言葉から、どうやったらその言葉が出てくるのかしら？」

まだ眠たい目をこすりながら起きる、時間がかかるにつれて頭も覚醒していくと

「毎度のことながら……フィーって何者なのよ」
「ただのメイドです」

ニコッと笑いながら私にベットから降りるように促す
こんなに気配を消せるんだったらメイドって暗殺者にもなれるよね

朝の朝食はフィーが食堂から取ってきてくれた。

妃候補の姫たちは食事等は部屋で取らなければならないそうだ
この部屋が普通の部屋よりもデカいのは生活の上で不自由がないようにするためか……

「で、今日の予定ですが」

昨日はパーティーがあつたばかりだから一日中ごろごろしていた
いなあ

「得にないので部屋で寝てください、それにそっちの方がリーにとつてはいいのでしょうか」
「まって……！私は確かに部屋でごろごろしていたいなあなんて考えてたけど、一日中この部屋にいても暇すぎだよ」

さすがだフィー、一瞬にして私の心を読み取るなんてはやメイドの域を越えている

さすがに私の言葉に同調したのか、困ったようにメモ帳を見ながら考え込むソフィア

「そう言われても、王子との食事は明日の夜ですしお茶会にしたってあと3日もあるんですから」

「外に出ても昨日のようにはからまれることもあると……」

確かにそれは面倒だ……

今度はザリーア王子が助けしてくれた時のような事は起こらないだろうし

「でも、何もせずにジツとしてるのもつまんないし。極力鉢合わせにならないような場所にでも行きましようか」

「離宮は確かに大きいですけど、暇を潰せる場所と言ったら中庭くらいしかないですけど」

「……会ったっていいじゃない。スルーすれば向こうの方もこないって」

来ても得意の笑顔（ニヤけ顔）で何とかできる、王国でもこの笑顔でみんなだいて（引いて）くれたんだから

どいてくれた人たちの引きつっているような表情を思い出す

結局のところ中庭には午後に行くことにして昼は部屋で王国から持ってきた本で時間を潰す

何気に文才に溢れている私は王国で無名の作家として本を出しこれまでに12冊もの本を出した。

その結果か、一冊平均にして200万部を突破するという王国初の偉業を成し遂げたのである、最初に言ったとおり無名の作家なのでだれも私が書いているなんて知らない。

だからなのかたまたま馬車での移動中に本屋で私の書いた本を買っている人を窓から見るとうれしくなって笑顔（ニヤケ顔）になる、そして馬車に同席している人に引かれてしまうことがある。

「リー、いい加減自分の書いた小説を読みながらニヤケないで」

「ニヤけてないよ」

「じゃあ鏡で今の顔を見てきなさい」

だってしょうがないじゃない、自分の小説が本になってるんだからそんな時だった、部屋の扉からコンコンと言う叩く音が聞こえた

「ほらフィー、お客さんだよ」

「あら？今日は誰も来客にならないと聞いていたのですが……」

訝しげに答えるフィーは、すこし？警戒（手には短剣）しつつ扉を開ける

そこには一人の男の人が立っていた、腰に剣をもっているので王宮騎士の方かな？

そんな考えをしているとその男の人はお暇な場合には我が国の騎士の演習場にもお越しく下さいと言い残しそそくさと退場していく。

なんだったんだ？

「へ〜、これは……面白くなりそうかも」

そして扉の前で一人笑うフィーの姿がそこにはあった、なんだか楽しそうな感じだ

もしかして今の男の人にときめいたのかな？

冗談でそんなことを聞いたら一瞬キョトンとして、「リーはあの方に……いえいいです、リーにはわからないですよね」と言われた。

〈ヴェザインSIDE〉

俺は最近になって自分は奥手なんじゃないかって思いはじめている
昨日のパーティーの時に俺は一回も自分が気になった相手に話し
掛けられなかった

気になる相手というのはカサリア王国のリーナ姫なのだが……

彼女は別に特別に美人だとかそんな感じではなかった、けれど昨日一瞬見たときに全身が熱くなるのを感じた。

あれが一目惚れというものなのかな？

だが、肝心の俺は彼女の所に行くことすらままならず一人悶々と
会場で彼女が退場していくところを見送るしかなかった。

彼女との食事は明日だし、彼女と二人っきりのお茶会もあと3
日後だ。

でも俺としては一刻も早くリーナ姫と話をしてみたい、というよ
りしたいのだ

だが俺が一人リーナ姫に会いに行ったとなれば他の姫たちから何
て言われるか分からないし、リーナ姫も俺なんかが来たら迷惑かも
しれない……

最近マイナス思考だな

「そんなに気になるなら騎士の演習にでも誘えばいいんじゃない？」
「演習に？」

俺の横にいつの間にかいた母上が突然にそんなことを言いはじめた

「ええ、あなたこれから演習場で剣の稽古するでしょ？そこでその

リーナちゃんにかっこいい所でも見せれば彼女のほうから話かけてくるわよ」

「ほう？」

それはなかなかの作戦だ、しかし

「どうやってリーナ姫を演習場に？」

「フッフ、そ・れ・は、これよ」

突然どこからともなく母上が騎士がつける服を出してきた
母は手品師になりたいのだろうか？

「でも、これじゃばれるのでは」

「大丈夫、カツラとかいろいろ準備済みだから」

なんで母上がこんなものをもってるんだ……
まるでそれにこの手際のよさはいつたい

「まさか母上、たまに王宮から抜け出したりしてませんかよね？」
「ん〜？さあね」

今度から門番に服装チャックを徹底するよう命令しなくては

確かリーナ姫の部屋はここだったよな……

部屋の前につくとあと扉にノックをして要件を言うだけなのにな
かなか手が前に出ない

頑張れ、頑張るんだ俺！！ゴールは目の前なんだからと、心の中
で葛藤していると

中から「……ないよ」「じゃ……見てきなさい」と

なんだか争っている声が聞こえてきた

まさか賊でも入り込んだのか！！とないことを考えた俺は扉をノックしてしまった

そして扉が開くと出てきたのは昨日も会場でリーナ姫の後ろで周りを警戒していた侍女が出てきた

どうやらリーナ姫は奥のほうで本を見ているみたいだ、そんな俺を見ていた侍女はポカーンと俺を見て「あなたは……」と、呆気に取られていた。

変装がバレるはずがないと自分に言い聞かせなんとか演習場に来ないか？と誘いをいれ部屋らか出る

出る時に聞いた「分かりましたヴェザイン王子様」と言った侍女の言葉は忘れよう

しかし、ようやく彼女と話すことが出来る。

さあまずは自己紹介からしなくては、いやすでに彼女は俺のことを……

三目 暇の潰し方(後書き)

文章すこし改正しました、内容は変わりません

演習場にて・・・

ガチャンガチャン

剣と剣がぶつかる音が聞こえる

そこはカキーンカキーンの効果音の方がいいのかな？

それはいいとして、私は今演習場に来ています。

午前中は部屋でのんびりと本でもと思っていたんだけどフィーに無理やりに連れてこられた。

それもこれも全部あの騎士さんの所為！！ 文句を言っても始まらないけど・・・

フィーもあの騎士さんが気になるなら一人で行けばいいのになあ 誰にも気がつかれないようにそつとため息をするリーナであった。

そんな時、そんな私に一括するかのように鋭い言葉が私に突き刺さった。

「リーナ様、あなたは妃候補でもありますが、カサリア王国の王女としての肩書きも背負って今この場にいます。どんな場であっても気を引き締めてください。得にこのような軍人がいる場では」

わかってるわよソフィア、私だってこの17年間でちゃんと学習してるんですから。

でも、・・・やっぱりソフィアの言葉は助かるかな。

その言葉でようやく私が王女って肩書きを背負っているって感じることが出来るのよ。

今の私はリーナではなくリーナなんだから。自覚をもたなくちゃね

「そんなに気を張りすぎてはいけませんよ、大丈夫私の前ではリーのまま構いませんから」

ソフィアの言葉は時として私に安らぎを与えてくれるんです

「しかし、リーナの時に突然リーに戻ってしまうこともあります。集中力をつけてくださいね？」

「ごもっともです。」

演習場というのは軍の騎士達が日頃から剣術や魔法などを練習するための施設、広さはだいたい体育館四つ分のものすっごく大きな施設で昨日の会場なんて目じゃないくらいの大きさだった。

それに加えて外にも同じような場所があるのだから驚くのはしかたがない、私の国では軍は王宮には滞在せずにちゃんとした軍施設の本拠地のような場所で行われている。カサリア王国は、この帝国と違い宮殿と軍を分けているのだ。

私たちが中に入ると騎士の方達は部隊ごとに剣の稽古やら魔法やらを頑張つてやっている姿が見えた。

私が驚いたのは、その中のある部隊の一人に何故かヴェザイン王子がその人たちの中にいたということだった。

よくこれだけの人数の中から見つけ出せたな私よ。

しかし・・・まさか迷子になって紛れ込んでしまった訳じゃないよな？

「ヴェザイン王子は剣技にも優れているみたいですよ」

助けようかと思案している私に、ソフィアが王子がいる理由を簡潔に述べてくれた

でも一国の王子様が剣技なんて出きるんだ、家の弟にも教えた方がいいのかしら？

「でもヴェザイン王子はすごいですね、見てください」

ソフィアはヴェザイン王子のいる部隊の方を、指をさす。

私も顔をまたそっちに向けると、王子は騎士の人と戦っているのが見える。

相手の方はなんか百戦錬磨の騎士って感じの恐そうなおじ様だった、そんなはつきり言ってヤクザにしか見えないような騎士さんを相手に、ヴェザイン王子は一步も引きを取らないような剣さばきで、相手と互角に戦っている。

不覚にも私はそんな彼に見惚れてしまった。

「あの王子の相手の方は確か騎士団長でしたな」

それはまた王子もすごい人と戦ってるんだな。

騎士団長と言えば部隊を率いて先頭に立つものすごい強い人だよなあ

「あら？驚かないんですか？」

驚きましたよ？それに見惚れちゃいましたから。

しかしですね、いやだつてね？

「私、サークス団長がソフィアに一撃で沈められる所見ちゃってるから……王子と団長が戦っていてもあまりねえ」

サークス団長も、王国では最強と言っているほどの戦闘能力の持ち主、そんな人を一撃で沈めたソフィアの怪物なみの戦闘能力をいつも見ているから、あんまり驚けないんだよね。

だって一介のメイドさんが、騎士のトップに勝っちゃうんだもん。そんな私の一言を言っている時に、その瞬間を狙ったようにヴェザイン王子がこちらを見てきた

「まさか、聞こえてたりして。ないよね？」

「はい、それにあれば（王子のリーを見る目がなんか熱いですよ）たぶん」

まさかヴェザイン王子は地獄耳なんてことは……

本当に、ちょうど良くこちらを振り向いたので動揺をってしまった私に、先ほどまで団長と戦っていた王子はなぜか戦いを止めこちらにゆっくりと向かってくる。

途中でもものすごい殺気が感じられ心なかでは「来ないですよ」とあせっている

やばい目から汗がでそうだ。

そんな私のもともせず王子は私の前に立つと

「あなたの侍女は、なかなかやるようですね」

……どうしようか

私のことよりソフィアの方が、彼は興味を示しているみたいだ。

「それほどでもありませんよ、それに先ほどの王子様もすごく格好良かったですし」

まずはお世辞を言わなくては
いや、その前に自己紹介からの方がいいのかな？

「そうか？あれは団長に手加減してもらっているのだがな……」

お世辞失敗だー！

一瞬彼の眉が上を向いたぞ！！

「そ、そうですか。あ、申し送れました私はカサリア王国第一王女のリーナです、この度貴方様の妃候補として帝国に来ました。」

まずは先ほどの失敗を濁すために挨拶を！！

というか、私は初めから自己紹介をしたかったんだけどな

「そうか、俺の挨拶は不要だな。あなたが言ってしまったわ」

しまったー！、なに人の挨拶とってんの私は

いえ、でもまて……先ほどの私の言葉はヴェザイン王子様の自己紹介になっていたのか？

「すみません……ところでヴェザイン様は何回告白などされたことがおありですか？私は恥ずかしながら一回もありませんので、ヴェザイン様の顔なら二桁いや三桁など」

今回は相手の墓穴の踏まないおだて方をしなくては

彼の容姿を見れば絶対に二桁は越えるほど告白を受けているはず
！！

「いや、俺は一回もない。逆に女子のほうから逃げてしまっただ」

ノーー

なんでなんでなの？こんなに頑張っているのに！！

「さて、俺はそろそろ練習に戻らねばな。リーナ姫ももう少し演習を見ていくといい、今後のためにも・な」

なにか意味ありげな感じの言葉に私は絶句する

まさかさっきの挨拶で苛立ちを爆破、私が王国に帰ったら宣戦布告なんてことに・・・

いやまてまて、ヴェザイン王子はそんなに暴君じゃない・・・はず

「ソフィア？」

「なんですか？」

「どうすれば相手のご機嫌をとれるのかな？」

何とかしてヴェザイン王子の機嫌を直さないとやばい！！

そのためには、まずは彼の人柄を知るのが一番か？ いやいやそれよりも・・・

「は？」

私が頭の中であれやこれや考えている、中一人私の行動を呆然と見ているソフィアがいた。

（ヴェザインSIDE）

母上の言ったとおりに騎士の恰好で何とかリーナ姫に演習場にくるように促すことに成功した。

それにしても、対峙して分かったがリーナ姫の侍女は只者ではない。

昨晚もチラリと見た時も侍女はリーナ姫の周りを警戒していたし、先ほどにしたって普通の人間には気がつかないだろうが、片手に短剣をしのばせていたのが分かった。

リーナ姫は侍女を他の姫と違い一人しか連れて来ていない。

ということはそれだけあの侍女が出来る人間そしてリーナ姫が信頼しているのだろう。

俺の剣術稽古は、王宮騎士団の第一部隊と一緒に行く。

8歳の頃から剣術に興味を持ち父上の許可を取って、日々訓練に励んでいるものの、王子という肩書きもあるため訓練日数と時間は厳しく決まっているため、他の団員より少し遅れを取っているのが現状だ。

俺に剣術や魔法などを叩き込んでくれた人、言わば師匠はこの第一部隊の団長をつとめるザークさんだ。

彼は、この王宮に30年騎士として務め、数多くの戦場を生き抜いてきた帝国では英雄的存在だ。

その証拠に顔は百戦錬磨のような感じで、顔に無数の傷があり他の団員とはオーラが違う。

彼に俺は剣術の基礎、魔法の基礎など数多くのことを伝授してもらい第一部隊の3番目のポジションを獲得している。

訓練が始まって30分くらいした頃だろうか、入り口付近でようやく待ちに待った女性が現れる。

彼女は、この演習場の広さに驚愕しているようで周りを見渡していたがなぜか急に物静かになり昨晚見た落ち着きある人になっていた。

俺は彼女が来たことの舞い上がり、あろうことが団長に試合の申し出をしてしまった。

団長ことザークさんは、俺と先ほど来たリーナ姫をチラリと見ると一瞬考え込み

「いいかヴェザイン、惚れた女はうばってでもものにしろ。じゃねえと俺みたいに嫁に逃げられちまうからな」

と、応援された。そのついでに試合も白紙にしてもらいたいのだけどなあ

帝国の試合形式は、古来よりある伝統的なルールを元に行われる。試合時間は21分、その中で三試合を行う。

時間は一試合5分、一、二の間に1分の休憩を挟み二、三試合の間に5分の休憩を挟むと言う時間割となっている。

戦いは行動範囲も決まっっていて縦10メートル、横8メートルの長さの中で剣を使つての勝負だ。

勝敗は三試合の間に相手の剣を弾き行動範囲外に飛ばすか、「まいった」と相手に言わせるかで、もし決着がつかなかった場合は三試合目が終わった時に何処で戦っていたかで勝敗は決まる。

縦10メートルの真ん中には線が引かれていて敵陣と自分の陣地を分けている、そして時間終了時に自分が相手の陣地にいた場合は勝利、逆に自分の陣地にいた場合は敗北となる。

いたって簡単なルールだ。

団長との試合が始まる、試合では魔法を一切使わず剣のみでの戦闘だ。

先に斬りかかった俺を、団長はいとも簡単に防ぎそして流れるような動作で反撃の一手を繰り出してくる。

なんとか団長の攻撃を前足を前に滑らすような感じで、間一髪かわしていく。

しかし、いつの間にか中央から俺の陣地の端まで追い詰められてしまっていた。

これが俺と団長の距離か……

「おいおい、気になる女が見ている前でもう降参か？」

その言葉に、俺はリーナ姫が来ていることを今まで忘れてた。リーナ姫がこの演習場にいるんだ。もしかしたらこの試合を見ているかも……

「お！？そうそう、その調子だ」

自分が持てるすべてで団長を中央まで下がらしたが、団長が俺に對して手加減しているのが分かった

悔しい感情が芽生えて更なる反撃へと移ろうとしたときブザー音がなり第一試合終了となる。

1分もの休憩をしたあと、ブザーがなり第二試合が始まる。

しかし俺は団長に遊ばれ続け俺は息が上がっているのに、団長は息すらも上がっていない

そしてブザー音がなり第二試合が終了となった。

やばい、……まったくはが立たない

まだまだ訓練が足りないんだな……

「おいおい、5分休憩なんだ。ちよいと、そのお前が気になる姫さんの所にも言ってこい」

突然自分の訓練不足を嘆いていた俺に団長がそんなことを言うてくる。

俺としては、あの負けっぷりを見られた後だから今は会いたくはないのだけど、団長が無理やりに俺を送り出す。

リーナ姫は簡単に見つかった、でも相手方のリーナ姫は何故かひどく動揺しているようである。

俺が近づいていくと先ほどまで考えていたあの侍女が見えて、彼女はもしかしたら俺よりも強いのかも思ってしまう。だからだろ

うか？ つい

「あなたの侍女は、なかなかやるようですね」と、自己紹介もまだにも関わらず侍女の話をし始めてしまった。

自分のことより彼女の侍女の話をしてしまつて不機嫌になるかと心配したがそれもないういで一瞬キョトンとして終わつてしまった。そのキョトンとした表情が見れてうれしかったのだけど・・・

それからまた他愛もない話を少しするとまあなんていうか、俺の心がなんだか暖かくなつてくるのを感じた。これはなんだろうか？ やはり俺は彼女に恋しているのだろうか？

そんな暖かい時間も終わりを迎えようとしてきて俺は惜しみながらも彼女に最後言う

「さて、俺はそろそろ練習に戻らねばな。リーナ姫ももう少し訓練を見ていくといい、今後のためにも・な」

ザークさんの教えのとおり彼女をうばつてでもものにするため俺も積極的にならなきゃな

まずは彼女に、俺が少しあなたのことを気にしているとアピールしなくてはいけない！！

演習場にて・・・(後書き)

文章改正しました、内容に変更はありません

四日目 花の意味は？

なぜか最近王子によくちよっかいを出されています、王子は王子でもヴェザイン王子のほうですよ。

最近と言っても初めてヴェザイン王子と会ったのは4日前だから会ってすぐと言ったほうがあっているけど。

やはりあれでしょうか？嫌われているんでしょうか……

演習場でのちよっつと失敗してしまった会話のせいなんでしょうか？今の最大の私の悩み所です。

「リー？今日もヴェザイン様から贈り物が届いております、今日で二日連続ですね」

「ええ、そうね……」

にっこりと語りかけるソフィアことフィーの手には、まるで誕生日プレゼントなどに包むかわいらしい包に巻かれている長方形の箱のような物体を持っていた。

予想したとおりのものが届いてきてしまった。

昨日の夜にも突然送られてきたこの箱の中には小さな花が入っていた。

最初は送られた意図が、いまいちよく分からなかったけど、フィーに花の名前を聞いて思い立ったのが、花言葉だった

その送られてきた花は、ステルンベルギアと言う黄色い花で、あまり人に送る花というよりは庭などに咲かせるものだ、そんなことはいいいんだけど問題のその花の意味は私の記憶の中にある限りではたしか「無駄なこと」と言う意味だったと思う。

わかったでしょ？ 王子は私にもう何をやっても決意は変わらないと言っているのよ……

最後にヴェザイン王子が言っていた今後のための言葉を聞いていたからこの花の意味もよく理解できる。

私のせいで戦争が起きた日には……最後には最悪の結末を思い描いてしまう

「どうしたんですか？」

そしてそんなことにもまったく気づいていないフィーはのんびり紅茶を入れてくれている

「どうしようこの花……」

意味は知っているからなんか不安なんですけど

「ん〜、ちょうど華やかな花が欲しかったですから窓にでも置いときましょうか？」

……私の聞き間違えだろうか？ なんだかリーがトンでもないことを言った気がする

フィーを見るとニコニコといった表情で見てるので本気なのだろう

「それにこの花を飾ったほうが、ヴェザイン様もお喜びになりますでしょうし」

「ないんじゃないかな〜」

そんな窓際に置いたらヴェザイン王子の反感を買ってしまうかもしれない

多分これを送ったヴェザイン王子は、私が部屋で震え上がっているのを想像しているだろうから
ホントだれか私を助けてよ

〈ヴェザインSIDE〉

どうやら母上に聞いたところ、女性というものは花の贈り物が大変喜ばれるらしい。

俺が午前のリーナ姫との会話で、気がついたことは互いに共通点、趣味が何一つ分らないことだ。

そのせいで話すのは短時間（試合中のこともあったが）で、話があまり盛り上がりすぎずなんだかりーナ姫が一人で話しているように感じた。

そこで次回の会話では、話を盛り上げ相手の警戒心を解くために彼女の喜びそうな花（ヴェザインの中での）を夜から送り、母上から教えてもらった私の送った花の意味「待ちきれない」を、俺のリーナ姫と話せる時間が待ちきれないこの思いを受け取ってもらえたらうれしい。

母上はそれ以外にも俺が送った花の意味を言っていたけど、初めその意味に気をとられて聞いていなかった。

ただどさほど意味の変化はないだろうから大丈夫だろう

「まあ？ これは、ヴェザイン王子様ではないですか」
「ん…？」

俺の目の前にどこかで見たような顔の女性がいる
彼女は……ルデリア王国の王女イルレーナ姫だったよな

「イルレーナ姫ですね？」

「はい！！覚えていただいて高栄です」

なんとも行儀のいい姫だ

「ヴェザイン王子様はこの離宮の中庭に来られるのですか？何時頃くるのですか？」

なんだか真剣に聞いてくるイルレーナ姫

俺、そんなに……時間を聞いて避けられるほどに嫌われているのか

「ここに来るのは初めてだ、ほんの暇つぶしですよ」

この離宮の庭に来たのは離宮からリーナ姫の窓が見えるから暇つぶしではないけど……

あの花は一日の半分は日にさらしていないと徐々に枯れていく、だからこちら側の窓に飾ってあるならあの花を気に入ってくれらと言うことであるから少しでもいいから覗きたいんだ、いや確認したいんだ

「先ほどから何を探していらっしやるのですか？」

「ちょっと、リーナ姫の窓を」

「リーナ姫ですか……」

どこの窓だったっけなあ

「……ヴェザイン様？そろそろ私は部屋に帰ろうかと思えます」

「そうか」

「ええ、それでは…」

俺の左をすり抜けイルレーナ姫はそそくさと離宮の中に入っていく
だが薄情なことにヴェザインはこのことに気がつかなかった
そしてイルレーナ姫がリーナのいる部屋の窓を一瞬睨みつけてい
たことも気がつくこともなかった。

中庭から出るとそこには一人の侍女が立っていた

イルレーナは侍女を無視し、先へ進む

イルレーナが先に行くとその後ろをついて歩く侍女、彼女はイル
レーナ姫の侍女だった

そして歩いているイルレーナは前を見ながらどこかぼんやりとい
い始める

「カサリア王国のリーナ姫ねえ、なんか目障りだわ」

「でしたら本国から暗殺部隊でも？」

「いいえ、目障りだからこそもっと簡単な方法で、でも残酷な方法
でやるわ」

「そうでございますか」

「あゝあ、今日の夕食会が楽しみね」

ニヤリという表情をするイルレーナ姫を侍女は悲しそうな表情で
見つめていた

理不尽な理由（前書き）

テストがあつたので更新が遅れてしまいました、なにか誤字脱字やへんな文などありましたら指摘していただけるとありがたいです。

理不尽な理由

『ほら来たぞ、地味子だ地味子』

『衣佐奈って地味だな』

『あなたを見ていると自分が綺麗に見えるから不思議ね』

これは何とも懐かしい記憶だ、小さい頃のいじめっ子達だ
それにしてもこいつら地味地味言いすぎじゃない？
と言うよりこっちは……

『衣佐奈？もう高校生なんだし化粧くらいしなさい！！』

『衣佐ねえって家族の中で一番地味だよな』

『将来、花嫁姿は父さん見たいからな？』

前の家族だ、なんで家族にまで地味地味言われてるんだろうか……

『見てみて、衣佐奈さんの卒業写真』

『すっごい、ここまで影薄い人っていないよね』

『そうそう、中学校でも友達少なかったらしいわよ』

余計なお世話！！

『いなくなつて分かつたけど衣佐奈さんって髪の毛整えて化粧もちやんとすればかわいかつたんじゃない？』

『そうそう、一度でいいから話しかけてみればよかつたかも』

『私一回も衣佐奈さんのこと名前で読んでなかつたよ』

なに？これ私知らないわ

自分の知らない記憶を垣間見ている私
そんな時だつた

「・・・ください」

何か聞こえる

「リーナ！！」

「はい？」

突然体が宙に浮いたかと思つた瞬間、星の重力によつて冷たい床に叩きつけられる私

あまりにも突然だつたので5秒ほど床とキスをしつづけてしまつた、ファーストキスは床さんか

どうやら私は寝ていたらしい、さっきのは夢か……

なんだかよくわからないがようやく頭も覚醒し立ち上がる

「というより、なんで話の初めが寝起きからが多いのよ」

「リーが寝すぎなんです」

苛立ちを隠そうとしないフィーは両腕を組みながら淡々と事務的しかし早口で喋り出す

それにしてもさっきの私の状況を皆さんに的確かつわかりやすくご説明しうか

どうやら私は午後にご飯を食べた後、一人で読書をしている最中に寝てしまったらしく机で寝ていたらしい

そこに先ほどまでどこかに行っていたフィーが、部屋に入ってくるやいなや机でのんびりと寝ている私を、ものすごい怪力で椅子ごとほうり投げたらしい

その証拠に椅子が私のすぐ隣に転がっている、まあこんな解説しているくらいだから私も相当頑丈な体になってきているのだろう

何せ床に半ば叩きつけられたような感じだったけど痛みがある箇所がない

「で、なんで突然のんびり昼寝をしていた私を椅子ごと投げたんでしょうか？というよりどうやって椅子と一緒になげたんんでしょうか？」

「さっき他国のメイドに偶然に遭遇したんですよ、そしたらですねあるうことか私に向かってバカにしたような口調で話してきたんですからストレスがたまってしまったって」

候補の姫同士の小競り合いがあるようにメイドにも同じことがあるのか

あれ？もしかして私が床とキスさせられる原因である椅子投げはもしかしてフィーのストレス発散のため？

「なんでのんびりしている私を投げ飛ばす必要が？」

「私がいらいらしているのに自分だけ幸せそうに涎をたらしながら寝ているのがどうしても許せなかったんですよ」

メイドさんの人選間違えたのかなあ

どうやら私はこここのところパーティーやら演習場の見学やらで自分が思っていたよりも疲れていたらしい

フィーに一方的な暴力で起こされたとき（私の方が立場では上なのに）時計を見ると時刻は5時を回っていた。

寝起きは最悪だったが疲れはだいぶとれている。

夜には妃候補の姫達とヴェザイン王子そして、この国の中枢たる国王に皇帝が来ることになっている夕食会がある、多分その時には今まで以上に気をはって出席しなければならないだろう。

夕食会は7時を予定で時間厳守で行われるためこの時に遅刻した姫は即刻国へ返されるらしい、それほどまでに今回の夕食会は厳粛なものなのだ。

フィーは先ほどの機嫌の悪さもなくなり（ストレス発散のため）この前の二の前を避けるべく急ぎ支度が開始される。

今回もドレスを着ていかなければならず私は全身黒のドレスを着ていくことにした。

化粧も湯浴みも一昨日どうように済ませ6時50分には完全に準備が整った。

今回の夕食会の会場は離宮にある所で行われるため部屋から割と近い、この夕食会でのメイドの入場は認められていないため私は一人で向かわなければならなかった。

「リー、なにがあってもまずは冷静沈着に物事を考えてくださいね」

部屋を出るとき心配するようなソフィアの言葉を強く噛み締め
ゆっくりと会場へと向かう

夕食会での失敗は？

「剣舞でございますか？」

「そうです、ルデリア王国のイルレーナ王女様が夕食会の中盤剣舞を披露なされます。その時の剣舞のパートナーをリーナ様にと」

「あの、なんで私が？」

「さあ？そこまでは」

ソフィアに不安な表情で送り出されて今会場へと踏み入れようとしていた時だった。

突然一人の執事の服装をした男が私に話しかけてきた。

彼は妃候補の一人であるイルレーナ王女様の伝言を伝えてきたと言う。

イルレーナ王女様は、今回の夕食会の中盤で皆の前で剣舞を披露してくれるそうだ。

そしてなぜだか知らないけど、そのパートナーに私を彼女は推薦してきたらしい。

不思議だ、私は一回も彼女とは話したことがないのだけど。

「その、私は剣舞とかよく分らないので」

「大丈夫でございますリーナ様、パートナーのやることはイルレーナ王女様の剣舞に合わせて剣を当てていただだけでいいのでございます」

「いやいや、そっちの方が難しいでしょう。」

「私剣なんて持ったこないですし」

「それに王女様も手を抜いてくださるようですし」
「手を抜くのでしたら他の方の方がよろしいのでは？」

せつかく推薦していただいたのだけど、足を引つ張ったら元も子もないだろう。

そして何より、今回突然の彼女の剣舞の披露はヴェザイン王子の剣に興味があると言うことからやることにしたのだろうし。なんで私がパートナーなのか意味不明だけど

「それがその、イルレーナ王女様がどうしてもと」

なんだか相手の執事さんも困り始めている

「……その、どうしてもとおっしゃるなら」

「そ、そうですね。それではよろしくお願いいたします」

頭を下げる執事さんはそのまま急ぎ足で会場にと入っていく

「まいりましたね……」

あそこまで頼まれたら断りずらいんだって。

でも大丈夫かな？ 剣舞のパートナーはやったことはないが何回か見たことがあるけど……

でもイルレーナ様は手を抜いてくださるらしいけど心配だわ

「どうかしましたか？」

そんな時後ろから最近敏感に気にしている人が来てしまった
後ろを振り返るといつ見ても美形な王子が立っていた

「ヴえ、ヴェザイン王子様。」
「そんなに怯えなくてもいい」

顔に似合わず昨日のようなかしまった言葉から砕けたような口調に気がついた

できることなら表情も、もうちょっと砕けてほしい所でもあるけど

「ヴェザイン王子と話すのもこれで二回目でございますね」

「王子はなくてもいい」

「え？」

「せっかく俺の妃候補として帝国にはるばるきたんだ。親しくなっておくのもいいだろう？ だったら呼び捨てで構わないもし出来ないのであれば様を後ろにつけてくれ。」

この言葉に私は多少なりとも動揺を隠しきれずにいる

昨日の一件と二日連続の花で、完全にヴェザイン王子には嫌われているかと思っていたからだ

どうやら私の思い違いだったのかな？ 今の会話の中で王子は私となぜか仲良くなりたがっている感じだ

「それと……俺が送った花は気に入ってくれたかな」

花…意味「無駄」結論…「覚悟しとけ」

そうか、敵に敬語を使う必要はゼロなんだ

なんであれだけで戦争まで発展しちゃうんだらうか……

「その、あまり」

「…そうか、すまなかつたな」

「いえいえ、そういう意味ではなくてあの花を部屋に飾るにはちょ

つと……」

私が答えた瞬間、ヴェザイン様の背後から何かのしかかるようなズーンとしたオーラが出来た。

だつて気に入らなかつたつて答えたらその瞬間こつちも（戦争を）やる気満々みたいじゃない

できれば後三日以内になんと説得したいから今は相手を挑発しないようにしないと

「急がないとな、時間もあれだし……」

でも、なんだか王子の変なスイッチを入れてしまったみたいなの……

〈ヴェザインSIDE〉

午前中にリーナ姫の窓にはなんと俺が送った花が飾つてあつた

これは気に入ってくれたんだらうか？ いや、送ったのが俺だったから一様飾つただけなのか

まあいい、これでリーナ姫に話しかける理由ができた。あとは前進あるのみ！！

と、そんなことを考えている時だつた

「失礼します王子」

「サエルか、何の用だ？」

扉を開け俺に近寄ってくるサエル

その手には何かの申請用紙のようなものを持っていた

「いえたいした用事ではないのですが、実は今夜の夕食会のことです」
「言ってみる」

「イルレーナ姫から中盤での剣舞を披露したいと」

「剣舞？一国の姫がか」

「ええ、そのようで」

声は多少なりとも驚いている感じのヴェザイン

それほどまでに一国の王族、それも王女が剣を扱えるのが珍しい

「それは見てみたいな」

「それですね、その剣舞のパートナーなんですが」

「騎士を貸してもらいたいと？」

「いえ、イルレーナ姫からの推薦でカサリア王国のリーナ姫にやっ
てもらいたいと」

「何!？」

サエルの口からでた名前に驚きそして困惑する

「確かリーナ姫は剣などは握ったことはなかったはずだが」

初めの彼女の資料ではそうなっていたはず・・・
どうということだ？

「分かりませんが、どうしますか？」

「……リーナ姫が良とするならばいいのではないかな？ だが万が

一があつてはな・・・兵士を数名いれておいてくれ」

「わかりました」

申請用紙にサインをするとサエルは部屋から出て行く

それにしてもなんでリーナ姫をパートナーに？
まあそれはそれで見てみたい、しかし怪我とかしないかが心配だ。

今夜の夕食会では、姫達の他には父上と叔父様が来る予定だ。

なんで祖父様が来るのかを言えば叔父様はこの国の皇帝だからだ
この国はもともと帝国主義で、政治の実権は皇帝が握っていたが
今から約1000年ほど前に皇帝から王に実権が移行した、なぜかは
分からないが。

それから皇帝は、国の顔として存在することになり皇帝は政治に
干渉することを許されず式典やその他の行事での司会や顔役を努め
ることになった。

皇帝は王族から選ばれ王になったことのない者になるためどっち
にしても王族は王になるか皇帝になるかしか道がないのだ。逆に言
ってしまえば今の帝国は帝国なのに制度は王政で王が管理している
という、奇妙な国でもある。

俺は直王を宣言してしまったから皇帝になるのは弟だろう。

そんなことはいいが、心配なのが叔父さまが変なことを姫たちに
得にリーナ姫に言わないかということだ

叔父様は俺の世話をよくしてくれたので昔の恥ずかしい話をよく
まわりの人間に話俺はその度によく笑われる、出来れば今回の夕食
会は腹痛でもなって休んでもらいたい

ちよつと重い気持ちで準備をし、準備を終えて会場にと向かう。

り、リーナ姫

俺が会場に入ろうというときに目の前で何だか考え事をしている
リーナ姫が目止まった

なんだか困っているオーラも出ている

よし！！　ここは一つ俺が声をかけてみようか

「どうかしましたか？」

俺が後ろから声をかけると何故かビクツと方を震わせながこちらを向いてくる

「そんなに怯えなくてもいいよ」

なんだかんだ言っただけで俺ってまだ一回しか彼女と話せてないんだよな
ここは親しげに話しかけておこうか今後のためにも

リーナ姫もなんだか慌ててこちらを向いて俺の名前を言うってくる
でも最後に王子か、できれば王子は取ってもらいたいな

王子って呼ばれ方は王子としての俺しか見られていないようで昔から嫌いだった

「王子はなくてもいい」

できればヴェザインって読んでくれないかな

そんな俺の言葉に困惑しているリーナ姫

これじゃあ逆に警戒されてしまうか

心の中で苦笑しながら俺は言う

「あ、そのせつかく俺の妃候補として帝国にはるばるきたんだ。親しくなっておくのもいいだろう？　呼び捨てで構わないもし出来ないのであれば様を後ろにつけてくれ。」

言い訳を言うとなんだかキョトンとした彼女

今だ！！　なにか話題を

「それと……俺が送った花は気に入ってくれたかな」

その瞬間に一瞬にして表情が凍りついた

「その、あまり」

その瞬間俺のまわりに雪がのしかかるような冷たい感触があった
あまりと言ったのか？あまりあまり・・・

「…そうか、すまなかつたな」

涙をこらえながら何とか言うことに成功する

そうか、彼女は俺と話したくもないのかもしれない・・・

どこで間違っただらうか？一体どこで

ちよっと今はいたたまれない気分なので一刻も早く入場しようか
そして母上に相談しよう

怖い思いは懲り懲りなんですよ（前書き）

誤字脱字などありましたらご指摘していただけるとありがたいです

怖い思いは懲り懲りなんですよ

夕食会は私が想像していた物とは、少し違ってた。

これまでいくつか貴族の方にご招待されたことはあったけど、相手の腹の内が態度で分かってしまうほどわかりやすい方としか食事などとったことがなかった。

今私がいる場所はそんな相手の胸の内を暴くような物ではなくて、姫たちはずっとライバルである他の姫を見ている。多分要注意人物になり得る者がいるか探しているのだろう。

部屋にはすでに皇帝と王様が座っている、どちらもダンディなオジサマだ・・・

でもオーラが他の人と違うわ、まるでお父様と居るみたいね
そしてそんな二人を見つめていた私は突然後ろから

「聞いておりますかりーナ様？」

「はい？」

気がつくと私をほとんどの者が私を見ていた
なにになに！？

「えっと……」

ぼーとしていて聞いていなかった、……やばい
こういうときは笑顔で受け流す

「……その、イルレーナ姫が剣舞の披露をなさるので」

事情説明をしてくれたどこの誰かも知らない執事さんが説明をしてくれた

だけどなぜだろうか、微妙に顔が引きつっているぞ？

というか、は、はずかしい〜

「そうですか」

周りを見るとすでにイルレーナ姫は夕食会の会場の剣舞を披露するために開けたのだろう広いスペースで準備を始めていた。

どうやらいつの間にかそんな時間になっていたらしい

剣舞は通常二人で行う物だ

剣舞とは剣術を使いあらゆる者を剣と踊りで再現するというもの多くの国で愛されているこの競技はすでに世界大会まで存在しているほどの人気なんだ。

さて、今回私がやるのは剣舞の中の歌い手だ。

剣舞では歌と合わせて歌う物と歌無しの剣舞があつて、私の場合は剣なんて握ったこともないから必然的に歌い手が必要な剣舞を求められている、歌無しの剣舞は二人一組でリズムをとりながら決められたテーマを使って表現をするものだ。これは剣の熟練でなければなかなか出来ないもので、私は初めこちらの方をやってほしいと言われたのだけど、剣なんて握ったこともない私は丁重にお断りしてイルレーナ姫に歌い手を申請しておいた。

「リーナ姫？お早く剣をお決めください」

・・・え？

「あの、聞いてませんでしたか？私剣は握ったことが…」

「あ、これがいいのですね？はいではこれを」

「いえ、聞いてくださいって」

何故か私のそばに近づいてきたイルレーナ姫は私の役割が詩だと言うのに剣を持たせてくる

それに私の言うことを何も聞いてくれない、大きな声を出そうにもここは公の場、大きい声はマナー違反だ。

剣はずつしりと重く手で持つのがやっとだ、よくこんな重い物を振り回せるなあ

剣の重さを感じていると執事さんの声とともに我に返る

「これより剣舞―四季―を始めたいと思います、剣舞―四季―は季節の表現を剣術によって美しく表現する剣舞です。この度力サリア王国リーナ姫とともにイリレーナ姫が表現いたします。得とお楽しみください」

ちよつとまっつて！？ 何の事？

「この剣舞でもしお二人が怪我などされた場合は個人の責任でございます。これは剣舞を引き受ける時にそのすべてを承諾したことになりますので分かつているとは思っておりますが、確認事項ですので言わせていただきました」

分かつておりませんが……

えっと、それはつまり怪我をしても自分の責任って事ですか？

あれ？というよりなんで私も剣を使うことになってるんですか？

「それではお二人方は位置にお付きください」

位置ってどこですか・・・

まずい、なんだか周りが私もやる方向になってしまっている

まあそんな時ですよ、突然私の体がしびれたように動けなくなつた。

あれですよ、金縛り状態ですよ経験したことあります？

体の感触がなくなっていくなか私の体が勝手に動き出す

頭の中はすでにパニック状態で叫ぼうと思ったが何故か口も開かず声も出せなくなっていた

そんな中、耳から執事さんの開始の合図が聞こえた。

私の目の前でものすごい速度で走ってくるイルレーナ姫、ちょっと待ってと言いたいけど声が出ない

イルレーナ姫の剣が私に向かって横に切りつけようとした時、勝手に私の剣が彼女の剣を防いだ

感覚がないから手に衝撃は来ないけど逆にトンでもない衝撃的なものを見てしまった。

剣を防いだ時に数秒イルレーナ姫の目を見た、まるで相手を殺すような目でこちらを見ていた。

彼女がなんで私にそんな目で見ているのかは分からなかったけど、本能的に私は殺されるかもしれないと頭によぎる。

怖いと思った。

彼女は私の防いだ剣から少し遠ざかると連続での剣の攻防、そして徐々に徐々に私の守ってくれる剣の動きが鈍くなりもう少しできられそうになっていく。

やばいって、ほんとにヤバいんだって、ストップストップ。

じりじりと斬られる恐怖心が高まっていく、泣きたくもなかったけど金縛りのせいか表情も変えられない

そして思ったとおり私の剣がイルレーナ姫の攻撃に耐えられず

左に吹き飛んだ

イルレーナ姫はそれでも勢いが止まらないのかそのまま剣を振りかざしてくる

私・・・またxxx？

〈ヴェザインSIDE〉

夕食会の前でちょっと落ち込んでいた、しかしよく考えたら彼女とはまだ二回しか話したことがないし確かに急に花なんて送られてきたら困ってしまう。

そしてなにより俺が送った花は確かにあまり部屋に飾るにはあまりにも不自然なような気がしてきた。

「積極的でももつと考えてからの方がいいな、あの花のプレゼントは無謀だったかな」

そう思ったらなんだかスッキリする

そうこうしないうちに夕食会は中盤になりリーナ姫の剣舞が始まるうとしていた

剣舞は二パターンあるが彼女達がやるのは剣舞―四季―と呼ばれる本格的な物だ

しかし、おかしいな？

「リーナ姫は剣など握ったことがないはず。」

そんな彼女が四季など出きるはずがないのに

そんな事をしていくうちに執事が開始の合図をだす

激しい打ち合いが続いていくがリーナ姫はどんどんイルレーナ姫に押されている

・・・それにしても変だ、俺から見たリーナ姫は何かが変だ

皆は感心したように二人を見ていたが俺からすれば……

そしてリーナ姫の剣が弾かれた瞬間だった、彼女は何か泣きそうな顔をしてるのを感じた。

彼女の表情は真剣そうな顔だが俺はなんだかそんな感じを彼女から感じた。

そして反射てきだろう、席にたつて彼女の所まで走る。

同時にイルレーナ姫の剣を振り下ろそうとしているのも分かった。

きっかけ(前書き)

誤字脱字などありましたら指摘していただけるとうれしいです。

きっかけ

これが魔法だと気がついたのは剣を振り下ろされる瞬間だった
以前にソフィアから、使ってはいけない魔法の一つに束縛と操り
があると聞いたことがある

束縛は相手を封じ込めるためのもの、操りは相手を意のままに操
るもの

ともに暗殺にとっても便利とされるのもだが、自然と魔法師の間で
この二つの術は禁術として扱われていったらしい

そして先ほどのイルレーナ姫の攻撃を何故か勝手に防いだ行動、
私は誰かに束縛と操りの魔術をかけられているのだろうか？ だと
したら目的はいつたい・・・

イルレーナ姫の剣を防いだのは、私が剣を十分に使えることにす
るためだ。

仮に怪我をしても私の不注意にすることができ。

この魔法がどこからきているのかは分からないけど、この部屋に
いることだけは確かはずだ。

いくら操りの魔術といっても、術師が見てなければイルレーナ姫
の攻撃を防ぐ剣のタイミングが分からないはず。用意周到な計画つ
てことかな？ でも、もしそうなら私の目の前にいる姫も一枚噛ん
でいることになるけど・・・

先ほどの彼女の目を思い出すとその可能性が高い気がする。

あれ？私の人生が終わろうとしてない？ もしこれで斬られたら
多分死んじゃうだろうし・・・

おっかしいなあ、地味な顔って綺麗な顔より厄介事に巻き込まれ
やすいのかなあ

というか、泣いていいですか？ めっちゃ怖いんですけど

あゝ、小さい頃はいろいろと楽しかったんだけどなあ 初めての誕生日にはお母さんとお父さんが笑顔で祝ってくれたなあ

小さい頃の記憶が頭に映像で蘇って・・・斬られてないんだから 走馬灯はまだ早いよ

ここまで約0・5秒

そして剣は今まさに私の頭を真っ二つに斬ろうとしていました

バキン！

私の頭上にあつた剣が折れて吹っ飛んでいくのが見えました。

その瞬間私は腰が抜けてしまつて思いつきりしりもちをついてしまったのでお尻が痛い

いまいちどうして剣が折れたのかは分からないけど助かった。

安心をしたとたん、どうしようもないほどの恐怖感が体中に駆け巡ってきた。

イルレーナ姫も何が起こつたのか分からないらしく呆けて突っ立っています

そんな私たちの前に、というより私の横にある人物が立っているのに気がついた

誰だろうかと見るとなんとヴェザイン様だった

そうか、彼が私を助けてくれたのね

「ヴェザイン様？」

私が声をかけると彼は私に手を差し伸べてきた

「立ってないだろ？」

今までに聞いたことのないようなやさしい声で言ってくる

私はこの声で体に駆け巡っていた恐怖感が一瞬にして消していた

「ありがとうございます」

何気にいい人なのかもしれない

そして私がヴェザイン様の手によって起こされた時、に周りの者もようやく現状を理解し始めると、

「王子！！剣舞中に割り込むとは……国際問題にもなりかねますぞ！！！」

剣舞は多くの国によって愛されていると言っていいほどの歴史があり、それをこよなく愛する者が多い

剣舞の割り込み、すなわち強制中止はマナー違反であり時に法の裁きの対象ともなりえる

そしてそのことにいち早く気がついた老いた執事がヴェザインに對して言う

「黙れ！ まだ気がつかないか！！！」

ヴェザインの怒鳴り声が室内に響き渡ると、ほとんどの者が目を丸くした

あの王子があんなにも大きな声を・・・と

「リーナ姫の動きが変だった、魔術による妨害があったと俺は判断した。割り込んだのもそのためだ！！！」

ヴェザイン様は私のちょっとした動きの変化に気がついてくれたの？ 私を嫌っているはずの彼が（勘違いです）

ちよっと感動している私にヴェザイン様が目で私に何かを訴えて

いる、多分私にも証言してもらいたいんだろう

「えっと、初めの時になにかの魔術で私は動けなくさせられて操られました」

あやつられた？ だってと室内はザワザワと、特に姫達が騒ぎ出す
そんな時にヴェザイン様よりも大きい声で指示をだす者が現れた

「ザークをここに呼べ！！・・・姫様方、誠に申し訳ないが今日の夕食会はこれで中止にさせていただきます、もし本当に魔術が、しかも禁術がこの部屋で行使されたとなれば帝国の名に泥を塗るようなことをした輩がいることになる、姫達にもしものことがあっても困る。」

それは国王であるアザイル王の声だった、適切な対応でこの件をかたづけようとしている

「リーナ姫、そなたには誰か腕のいい者を護衛につけよう」

そしてもう一人、皇帝が何故か私に護衛をつけると言ってきた。
ありがたいけど、そんなの必要ないよ、フィーがいるもの

「失礼ながらもうしあげます、すでにリーナ姫には腕のいい護衛がついているようなので大丈夫かと」

私の代わりにヴェザイン様が言ってくれた、あれ？ なんでフィーの強さをしってるの？

ヴェザイン様……侮れない人だな

そして国王の指示で周りは騒がしくなっていく中イルレーナ姫が私の所に近づいてきた

「今回は見逃すよ、せいぜい油断しないことだな」

脅しです、しかもすっごい怖い脅しです。そしてなによりその言葉は犯人決定ですよ

いつの間にか私は彼女の暗殺リストに名前を書かれてしまっているみたいです、というかあなたとはまだ一回しか話してませんよね！！ なにか恨みでもあるの！？

「姫、俺が部屋まで送っつていこう」

またも呆然としている私にやさしい、今まで聞いた中でもっともやさしい声でヴェザイン様が声をかけてくれた、顔もやさしい顔になっつてくれればグツとくるんだけどなあ

「ありがとうございます、私を助けていただいたことも含めてなんと感謝したらいいか」

「いや、俺はいつもその、お、お前の事を「兄貴！！大丈夫か！？」からな・・・」

うお！？なんかヴェザイン様から殺気が・・・、何？何言いたかったの？

「・・・とりあえず、行こうか」

「はい」

突然の乱入者である第二王子のザリーア様を無視したヴェザイン様は私と共に部屋をでる

小さい声でヴェザイン様がザリーア様に後で地下牢に来いと言っつていた言葉は脳内削除をしておこう

多分アレも兄弟のスキンシップなんだろっ、
そっ思っしよっしよっ
っ。

話をしようか（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘していただけるとありがたいです

話をしようか

夕食会の後、会場からそう遠くない私の部屋にもたくさんの人の騒ぐ声や怒鳴り声など聞こえてきた

それもそのはず、帝国の妃候補の一人に禁術らしき魔術を、大勢の夕食会に参加していた人の目の前でかけられていて、帝国側はほとんどの者がそのことに気がつかなかつたからだ。

魔法師の数も他国と比べ比較にならないくらい多い帝国でそのような事件が起きてしまった、これは帝国の権威を揺るがす大事件になりかねないことだった。

唯一、帝国の面子を潰さずにしたことは、王子がそのことに気がついたことだろう

たぶん外のこの様子だと私に魔術をかけた魔法師は見つからないだろうな、今回の用意周到な計画的犯行をした者が証拠を残すはずがない。

とまあ、これは私なりの考えで、さらに言うところの事を総合的に考えるともしかしたら今後も私は誰だか知らない人に命を狙われ続けるって事なんだよね・・・一人はイルレーナ姫だと思っけ。

小説とかでは狙われた姫を勇敢な王子が助けてくれるって展開だけど、ヴェザイン王子はどうだろうか？

なにげにいい人そうだから大丈夫だろうか？

出会ってからまだまだで遠慮してた所もあつたし他にもトラブルがあつて気まずい関係になつてしまつていたけど、出来れば仲良くしていきたいし。

どうしようかなあ・・・

「どうかしましたか？」

「いえ！！、ただ緊張してしまって、ヴェザイン様が私の部屋にいるのってなんだか不思議な気分だし」

「そうか？まあ俺も多少は緊張はしている」

「嘘だ！！ さっきから表情がまるつきり変わってないじゃないか！！」

「・・・そういえば彼は【無表情王子】だったな、最初はもったいっこいい名前がいいんじゃない？ とか思ってたけど…似合ってるねえ、そのあだ名」

「ヴェザイン様は、その、女性の部屋に入ることが多いのでしょうか？」

「彼も王子である前に男だ、もう18ともなれば経験くらいあるだろう」

「ない、それに俺は童貞だ」

「……」

堂々と女性の前で答えないでいただきたい

でも何故か彼の堂々とした態度がおもしろいと思う自分がいた。

なぜそこまで堂々と言い張れるのか彼に聞いてみようかな？

「クスッ」

「？」

「すいません、フフ。ヴェザイン様の堂々とした話し方がおもしろかったものでつい。」

さきほどの堂々とした表情でのあの言葉を思い出すとさらにおもしろくなる

笑いが止まらないわ、フフツ

「そうか・・・初めてだな」

「何がです？」

「君が笑った所を見るのは初めてだ、あ、いや、初めてで当然だな。俺たちはまだ出会ってそんなにたつてないからな」

「そうでございますね、私も初めてでした」

「何がだ？」

「先ほど私を助けてくれた時、私は始めて男の方が頼もしいと思っ
たんです。格好良かったです」

私がそう言ったら一瞬だけヴェザイン様の頬が赤くなったのは、
気のせいだろうか？

それにしても

「ヴェザイン様は、よく私に魔法がかけられているとお気づきにな
られましたね？」

私が思う限りは、あの剣と剣の斬り合いではあまり不自然な動き
を私はしていなかったはず、感覚がなかったからどうかは分からな
いけど

「お前の動きは確かにあまり違和感がなかった、だがその一瞬お前
が泣いているような感じがしたんだ。それで近づいたらお前の体に
魔術がかかっていることに気がついた。偶然だよ」

「……いいえ、偶然ではありませんよ？あなた様は私の表情から何
かに気がつき私を助けてくれた。フフよかったです」

「よかったです？」

「ええ、あなたに助けてもらえてよかったです」

だって、たったこれだけの短い会話だけでもこの方の暖かな性格が分かったんですもの

私の言葉の一つ一つにヴェザイン様は答えてくれて、声のトーンが変わっていくのがわかる。

「そうか……、姫とはあと二日しかいられないだろうが……」

その言葉をいた後さらに続けて彼は爆弾発言をしてくれた

「俺は、君を選んでもいいだろうか？」

「ん!？」

君を選んでもいい!! 妃にしてもいいか?

いやいや飛躍しすぎだよ私、彼が私を選ぶわけないよ。たぶんあれだね、話しかけやすい人だと言うことで二度目のお呼ばれにしてもいいか? ってことだよね?

この一週間は二度めのお呼ばれを受けるためのいわば選考会のようなものだから

「未だこの二帰制度を使っているのは帝国だけなのだよ」

今私が行っているのって二帰制度って名前なんだ。

「二帰制度は、帝国建国から国のトップの妃を選ぶ時に当たり前にやってきた伝統的な選び方なんだ。選び方はシンプルで皇帝国王が二名を指名する権利を持っているんだ、他に貴族代表で四公が当主に一人ずつ指名権がある。それとあと俺が一人の指名権を持っているんだ。合計8人が俺の妃候補として残ることになる。そこから俺

が3ヶ月8名の姫と過ごして1名を指名するんだ。どっちにしろ俺が決めるんだから、そんな面倒な事をしなくていいのになあ」

なんだかよく分からないけど面倒な制度なんだな。でも王子が選んだ人って他の人から結構いじめを受けるんじゃない？【泥沼の妃候補達】的な感じでさ

「姫、そんなに心配そうな顔をしないでくれ。君の心配していることは多分大丈夫だ、選ぶ時に本人以外には選んだ姫を知ることが出来ないようになってる」

「分かりました……あの、ヴェザイン様はなぜ私をお選びになるとおっしゃったのですか？」

やっぱり本人から直接聞いてみたい

「……あなたといると、ドキドキするからな」

それはつまり、あなたといると何かとトラブルが起きるからおもしろいと？（違います）

「そうですか、私もあなたといても別に不快感もありませんし逆に楽しいことやドキドキすることもありました。こんな私でよければ選んでください」

出来る限りの笑顔で答える、つられて彼も照れくさそうな表情に……！？

なんだ！？ 一瞬だけヴェザイン様の表情が変化したけど、いや目の錯覚かな？

「ヴえ、ヴえざ「姫様！！大丈夫ですか！！」……そ、ソフィア」

私が彼の表情が変化した事を言おうとしたときだった、突然部屋に猛スピードで突撃してきたソフィア

「どこか怪我とかは……なさそうですね」

安心した表情を浮かべるソフィア、なんだかうれしなこうして心配してくれる人がいるのって

「うん、大丈夫だよフィー」

「リー」

見つめあう私達を隣で一人置き去りにされたヴェザイン

「姫……」

「あー！はい」

完全に二人の世界に入っていたリーナはようやくヴェザインがいることを思い出す

「今夜は遅いので詳しい話は明日しようと思う。今夜は十分に体を休めるといいだろう」

「はい！！わかりました」

ヴェザインは一度リーナを見ると扉に向かって歩き出す

「そっだヴェザイン様」

「なんだ？」

最後に一つ

せつかくヴェザイン様から歩み寄ってくださったんだし私も言わなくちゃ！

「私のことは出来ればリーナとお呼びください、姫とかではなんだから呼ばれた気がしません」

「わかった、おやすみリーナ」

「ええ、おやすみなさいヴェザイン様」

こうして長い一日を終えることができ寝ることができると思いきや、さっきの会話を含めてフィーに散々質問攻めにあうはめとなった。

五日目 変身をしようか！！

空を見上げれば青い空と白い雲

下を見れば緑の草や色とりどりのきれいな花

前を見れば丸い顔の……猫？

私の手を見ればとても柔らかそうな肉球がある

よく見れば私の体中に黒い毛がびっしりと生えているのが分かった

今私がいる場所は離宮の中庭です

いやあ〜中庭って以外にデカいんだよねえ、侮ってたよホント

ベンチに座ろうとしてもなかなか届かなくて私のジャンプ力では座れないというより乗れない

まあ私の体がまだ生後何ヶ月の赤ちゃんだからしょうがないかな
そういえばまだ言っていなかったね、私ことリーナはただいま人間
やめて猫になってます。

ことの起こりは昨夜からになります。

ソフィアに夕食会での事を細かく説明すると何故か急にこんなことを言い出しました

「リー、あなたは自分の考えを相手に伝えないからこの様な事が起きるんです、仮に聞いてほしい相手に聞いてもらえなかったとしても周りの人が止めに入ってくれたかもしれない。相手にそして周りに自分の考えをきちんと示すことこそが重要なんです。ですが先ほどの夕食会でのリーの行動を聞いているとそこがかけているように感じられました、いいですか……」

などなど永遠と喋っていいほどの時間、フィーの説教紛いな授業を聞くはめになってしまった私。

本当なら早く寝たかった私は何とかフィーを言いくるめ明日の朝に聞くと行って強制的にやめさせてもらって寝ることにした、フィーも私が疲れていることによく気がついてくれてなんと朝の6時からやるといいだした、本当に分かっているか頭の中で議論する予知がありそうだな。

そしてなんとか寝ることが出来た私、しかし！朝起きると5時私の頭の中では今なら逃げれるかも……と、思った私はフィーに置き手紙を書いてこっそりと部屋を出た。

そしてそれから私の不幸の始まりでした。

正直に言おうと思う、私は部屋を出て約10秒後に全身黒ずくめの怪しい二人組と遭遇してしまったのだ。

その時の状況はこうだった

――朝の5時20分――

フィーには悪いけどどこかでのんびりしよ、離宮なら危険度は低いだろうし。

この時は昨日起きた事件は離宮であったと完全に忘れていた私。

開放した気分で軽いステップで一階に降りようと階段を降っていた。

昨日の夜のことを思い出すと背筋がひんやりとするような気分になるが、あの時のヴェザイン様の背中を思い出すと不思議とそんな気分は消え去って暖かい気持ちになる。

多分これは彼が私を嫌っているわけでも戦争をしようとしているわけでもないことがわかったからの安心感からくるものであるう。

考えてみれば直接彼から嫌いとか宣戦布告とか言われたことなかったなあ、私の早とちりだったか

今までの私の一方的な被害妄想を思い出すとちょっとはずかしいそして上機嫌の私、そんな私の耳になんだか嫌な予感抜群の会話

が聞こえてきてしまった

「おい、たしか二階だったよな。リーナ王女の部屋は」

「ああ、旦那様がちゃんと場所を昨日のうちに確認したらしいからな」

「でも、暗殺なんてもつと後にやればいいのにな」

「しかたねえよ、旦那様はちよつとバカだから」

・・・叫んじゃダメよリーナ！、いいここはスルーよスルー

いくら私の名前とか暗殺とか耳に入ってもスルーしなくちゃいけないのよ

今私の部屋には誰もいないしフィーが来るのだって6時だろうし、誰にも危害はかからないんだからこのままスルースルー

心の中で自分を抑え込もうと必死です、そしてさらに私を緊張させているのは、先ほどの声私が降りようとしている階段のすぐ下から聞こえてくるんで。

いまさら上に降りようがありませんかなりピンチです。

そして時間は過ぎていき私の目の前にあからさまに怪しげな全身黒一色の二人組が階段を上がってきました。

一人は小柄な体系でもやしのような感じの男、もう一人はお腹が出ていてメタボぎみな男でまるでかぼちゃみたいだ。

そしてそんな私は彼らが階段を登ってくる時に合わせてまるで先ほどの会話を聞いてなかつたですよと思わせるように笑顔でとおり過ぎる。

「……おい、リーナ王女の特徴を言ってみろ」

「たしか黒髪で地味な顔立ち……」

ダッシュです、今までにないくらいの早さで私は階段を駆け下りた。

後ろからなにやらデカイ声が聞こえてくるが気にしない、今の状況で分かったことが一つある。

暗殺者達はバカだ！！

なんで暗殺者があんな目立つ服着るんだよ！！　そしてなんであんなにデカイ声で追いかけてくるの！？

すぐにも警備の人たちに見つかって終わりじゃない

けどいつまで走っても警備に当たっているはずの人たちが来る様子はない

「もう！！　なんなのよ、昨日といい今日といい」

妃候補なのにここ最近頻繁にピンチな場面が多いな、いや妃候補だからなのかな？

曲がり角を曲がり走りながら後ろを振り向くと驚いたことにもやしとかぼちゃはまだ追いかけてきている。

それに私に追いつきそうだ。さすがに暗殺者だけあって運動神経は抜群なんだな、メタボがいるのに・・・

「……………しょうがないわね」

次の曲がり角で完全に巻いてあげるわ！！

そして次の曲がり角を曲がった。

二人の男たちは息を切らせながらリーナ王女を追いかける。

王女もよく見ればすこし息切れを起こしているみたいだ

「おい、次に王女が曲がるときに一気に行くぞ」

「おうよー!!」

そして王女が曲がり角に曲がったとき一気に男二人はペースを上げ曲がる。だが……

「・・・おい、王女はどこにいった？」

「わかんねえ・・・」

曲がった先には長い一本道でその先は離宮の中庭だった、いくら王女といえどもこの一本道を数秒で走り抜けるなど出来ようがない

「あの王女、きつと魔法師だったんだクソッ」

「そんなわけないだろ、昨日は魔法師の術に簡単にかかってたし」

男たちは悪態つきながら周辺をじっくりと見て、ここにはいないと確認しタイムリミットがきたため一旦退散した。

だがリーナは本当は男たちのすぐ近くにいたのだ。

男たちは一匹の黒色の猫が廊下の隅にうずくまっているのに気がつかなかった

「にゃ〜お（あつぶなかった）にゃんにゃあ（あと少し遅れてたらバレるところだったよ）」

先ほどまでうずくまっていた猫は立ち上がり鳴き声をだす。

リーナの変身は変身した物のすべてをすることができる、猫に変身したら猫語を話すことができるのである。

ただし人間の言葉を喋ることはできない。話せるのは猫語だけだった。

「ふにゃ〜にゃ　（さ〜って、どうやら暗殺者も撒いたことだしせっかく猫になったんだからもう少しこのままのんびりしてまじょうかねえ）」

そして離宮の中庭にのんびりした足取りで歩くリーナ
そして冒頭に移る

「にゃあにゃあ？（えっと、君は……？）」

私の目の前には茶色の毛をした私よりすこし大きな猫がいる。

私が離宮の中庭のベンチに乘ろうとしたときに弾みで転んでしまい、そんな私を覗き込むような感じでオスの猫が私を見ていたのである。

それにしてもこの猫……かわいいな

「にゃ〜？　（私リーナよ、あなたは？）」

「にゃ？ふみにゃ　（俺？　俺はターニヤだよ）」

首を傾げる仕草ををするターニヤ君、そしてそれから何故か話たら止まらなくなってしまうた私とターニヤ君は二時間近く話込んでしまった。

そろそろ戻らないとフィーが心配する時間だ

「にゃ〜、うみゆ　（そろそろ私帰るね）」

「みにゃ〜ん　（え？そうだねリーナはお姫様だからしょうがないか）」

「にゃ……にゃー！？　（うん……なんで知ってるの？）」

知ってるってことは私が人間だってことを知ってるってことだよ

「にゃん (知ってるよ、猫ってそういうの敏感なんだよ)」

でも、それといつても私までは特定できないでしょ？ 姫とかまでは

「にゃごろくにゃ」 (それにリーナが猫になるところ見ちゃったしね)」

「にゃ」 (あそこにいたのかあ、気がつかなかったよ)」

今度はもつと考えて変身しないと

「みゃあな (リーナ、なんだか君の事で王宮が騒がしいよ。もしかしたらよからぬ輩が来るかもしれないから気をつけてね)」

「みゃ」 (ありがと、じゃあね)」

何気に動物にまで心配されている私、うれしいじゃないですか
さてそろそろ部屋に戻らないとね、変身は部屋で解いたほうがいいでしょうし

か、階段がきつい

私の部屋は一階にあるわけではない、そして変身した体は生後間もなくの赤ちゃん猫。正直いって階段はきつい

そしてなんとか登りきった私に待っていたのはながい廊下だった

「にゃ」 (いいかげんにして)」

もうへとへとですよ。

だがそんな私に天使が降臨したのだった

「は、どこにいるかと思えば動物になっていたんですか」

廊下で疲れきっている私の後ろには聞き覚えのある声が聞こえた。振り向いてみるとそこにはホットしたような表情をしたフィーが立っていた。

「にゃー (フィーー) 」

「もうすこしお仕置が必要ですかね」

天使の皮をかぶった悪魔だフィーは！！

「さあ早く戻りましょうか、実はヴェザイン王子とのお茶会が今日に突然早待ったんですよ。午後から離宮の大庭ですので今からご飯を食べたら大忙しですよ」

「にゃあ！！ (大丈夫！！がんばるね私！！) 」

誤解も解けたし楽しいお茶会にしたい、それにもっと彼とは話して見たいからね

「か、かわいい」

そんな決意の私をよそに手をあげて気合のポーズを決める私にフィーは猫になったりーのかわいさに悶えていた。

今後の対策（前書き）

リーナの変身について

- ・リーナは変身した姿からまた変身して別の姿になることは出来ません
- ・別の姿に変身するには一度元の姿に戻る必要があります

今後の対策

「離宮に暗殺者ですか？しかもあなたを狙った」

「うん、そうなのよ。それでねこのことを……」

「わかっていきますよ、私の方から護衛の方を通じて王子に報告させ
ときますから」

「よろしくね」

どうやらあの暗殺者二人組は誰にも気がつかれないうちに離宮から逃げたらしい、あの体格に似合わず結構な手練だということだ。

それにしてもこの王宮大丈夫か？こんなに簡単に侵入者をだして

「それにしても……二日続けて命を狙われるなんて、これからは少しは警戒心というものを強く持つてくれないとこっちも困るんだよ？」

妹を諭すように言うフィーに私は頭が上がらない、確かに今回の抜けだし？はやりすぎたと反省している。フィーにもどうやら心配かけたみたいだし

「みたいではなく本当に心配したんですよ？あなたの姿まあ猫でしたけど見たときは安心したあまり拳がグーになりました」

フィーの安心したときの行動におかしな所があるけど……

「さて、そんなことよりもまずは変身バージョンのリーナに戻ってください。その顔でヴェザイン王子様とお茶会に出るのもいいかと思
いますけどまるつきり別人なので誰かわからないと思いますけど」
「そうね」

今私は変身していないんで王女リーナを知っている人から見るとまるで別人なのだそうだ。

その理由は顔立ちもそうだけど、どちらかという髪と目なのだ。私の変身バージョンは両目髪は全部黒一色だが変身していないノーマルバージョンでは両目髪が茶色だ。

なのでホントにと言っただけいいほど別人である、でも何故かファイアは私がどんな姿で変身してしようが一瞬で見抜いてしまうのである。なんで見抜けるのかということは何度も聞いてはいるけども一行にいい返答はくれない、ついでに私の変身を知っている人はファイアだけだ。別に私が自分から言った訳じゃない、初めて会ったときに小声で「あなたってなんで自分を偽っているの？」と言われてたんだ、はつきり言えばアレには私はかなりビビった。

だって神様からもらった能力のはずなのにそれに気がついた人が現れたんですもの、でもその時は言い訳を頭の中で永遠と考えていたからそんな事を思ったのは後の方だったけど。

「今回の二件であなたは完璧に狙われていることはわかりましたけど、なんで狙われているんでしょうね？」

「ええ、そこは私も気になるところよ、たかが隣の国の王女が二度も連続で狙われるなんて」

「あなた何かしたんじゃない？」

「そんなわけないでしょ、帝国に来てからあまり他の人との接点がないんだから。」

「ですよ、あのお披露目会以外はあまり他の人となんかと話さなかったですもんね」

化粧をしている最中に私とソフィアは何故私が突然と言っているほどまでに命を狙われているのかを議論している

「私が思うにですねヴェザイン王子様の贈り物が原因になっているのだと思うのですよ」

「贈り物？あの花が原因ってこと？」

「そうですね、だってそうでしょ？妃候補の中のあなただけにあの花は贈られた。もし仮にその事実を誰かが知ってしまったらどうなるでしょう？」

「それが他の妃候補だったりそれに関係した者だったらありえなくも……でも暗殺なんか考える？」

「それが貴族と言うものですよ、目障りな人間は消していくんです」「怖いねそれ……」

「ですから今度からはご自身の危ない今の環境を考えて行動していただくかないと」

「了解です」

これからは自分の行動に責任持たないとなあ

化粧も終わりドレスに着替えた私は頭の中で何故いつもドレス？
と思いつつもお茶会に出るための準備が整っていく

この一週間の中で最後となる王子とのお茶会は本当なら明日行われる予定だったが今日の午後に変更された

フィーに聞いた所昨晚のことで魔法師が王女の命を狙ったと危機感を募らせた国王が早めの対処として変更されらしい

たぶんお茶会ではヴェザイン様からあとの2日間のことについてお話があるだろう

昨晩はヴェザイン様は護衛はいらないとおっしゃっていたけど帝国としては万一の事を考えて明日から護衛がつくことになると思う私の行動も制限されるんだろうな……面倒なことだ

「さて参りましょうかりーナ様？」

「ええ、そうね」

「あなたのメイドからこちらの護衛を通じて暗殺者について聞きました、初めにお詫びします」

お茶会が始まったのはいいけど、何故か初めに目の前にいるヴェザイン様から謝られた。

「えっと、私は怪我もしておりませんし頭を下げていただけなくて
も」

「いや、離宮は王族が守ってなくてはならない神聖な場所。賊に入られたなど帝国の恥」

なんかかつこいいなあヴェザイン様

「そうですか、ですが私の見立てではあの暗殺者はけっこうな手練です。」

「わかっています、昨晩の事で離宮の護衛を増やしておりますから、並大抵の暗殺者では侵入することすら出来なかつたはず、ですから相手は魔法師である可能性が高いしかも相当な腕の持ち主」

私ってそんなにヤバい奴に追いかけられてたのか、よく命があったな私

「そこで、あなたに二名の護衛をつけることとなりました。あなたの証言で暗殺者は昨晚と同じようにあなたを狙って来たことになり、まずからリーナには不便をかけると思うがこちらに協力してほしい」「わかりました」

「あなたの行動は多少制限さしてもらいますが、ずっと部屋にこもっているのもストレスが溜まると思うので、護衛をつけた状態で一時間は外に出てもいいことにする」

一時間か、短いけどしかたがないか。

帝国も離宮にまで賊が侵入されたのは初めてなのだろう、だから私に慌ててお茶会という名目で今後の対応について話しておきたかったと言う所か

誰の目からも一目瞭然のように狙われているのは何故か私だからな

「……すまなかつた」

「え？」

「その、今朝弟から言われたんだ、今回の暗殺騒動は兄貴が突然リーナ王女に贈り物など渡すからだ」と

「ザリーア様がですか、……確かに今回の暗殺騒動の原因は貴方様の贈り物が原因かもしれませぬ」

「……」

「ですけど、贈り物じたいはそこまで悪いことなのでしょう？確かにたった一人だけに贈り物をするというのは他の候補者たちにとってはいい印象は抱かないでしょうし憎い対象を生んでしまう行為です。ですけどあなたはそんな対象を生むために私に贈り物をしたわけではないのでしょうか？」

「ああ、俺はただ自分の気持ちを伝えたかったただだからな」

「だったらヴェザイン様。あまり言いたくはないのですがその行動の責任として絶対に私を守ってくださいね？」

でないと私死んじやいますから

「ああ、そうだな。責任はとるつもりだ」

「なんだか最後の言葉は別の意味にもとられそうだな」

一週間の舞台裏（前書き）

ちよつと出番が少ない二人とリーナが狙われる理由を書いてみました

一週間の舞台裏

一週間の舞台裏

それは妃候補が離宮に来てから四日後の出来事でした。

「暁の魔法団？あの暗殺部隊のことか？」

「ええ、我が帝国の魔法師達が独自に作り上げた部隊です」

深刻そうに資料を机に座りながら読む男とその男の前に立って報告をする男

「だがこれは……」

「間違えないと思われませんが、最近になって暁の魔法団のメンバーらしき者たちが王宮で目撃されていますから」

「しかし……ありえるのか？我が帝国の貴族それも四大公爵家のどこかが暁を買収など」

「帝都諜報機関からの確定情報です、暁は独自に施設された組織ですが掌握しているのはもともとギルド連盟です。最近になってギルド連盟が衰退していった資金提供が出来なくなってきていた所をどこかの公爵家を買収……買収に使った金は完全にもみ消されていますからおそらく告発も発見も難しいかと」

「しかし、買収となると多額の資金が必要のはずだ。もみ消せるわけが……財政担当だからか」

「ええ、そのようです。帝都諜報機関は王宮に対して警戒するよう

に要請がきています。いかが致しますかザリーア様」

「むろん警戒はするさ、それに今は他国の姫君までいるんだ。事が起こってからでは遅すぎるからな」

「では護衛にはそのように伝えます」

報告を終えた男サエルは第二王子であるザリーアからの命令を伝えるべく部屋を出る

そして部屋に残ったザリーアは誰もいない部屋でそつとため息をつく
第二王子ザリーア、主に政務などには関わらず治安や貴族の不正を
探る王宮諜報機関のリーダーを努めている

帝国には二つの諜報機関があり互いに連携をとりながら治安や悪性を暴いてきている

だが王宮諜報機関は人数が少ないのと王都でしか行動出来ないため
外の情報収集が出来ない

そのためもう一つの諜報機関、帝都諜報機関との連携は必須になってきている

帝都諜報機関は皇帝直属の諜報機関であり帝国の隅から隅まで活動している、こちらとは比べ物にならない機関である

この国の歴史的に見ても、もともとは皇帝がこの国を収めていたのだからそれはしょうがないことである

長い歴史がある帝国は未だ皇帝の属している機関の方が国王の直属の機関より強いのが今の帝国の現状だ

「なにかが起こるか？そうだなこの一週間でなにかが起こる」

ザリーアが考えた結論はさらなる不安を自身に与える結果となった

「贈り物だと？」

「ええ、そのようです」

信じがたい事を報告にきたサエル

「まずいな」

「ええ、まずいです」

兄貴……もうちょっと考えて行動してくれ
というかいつもは頭がよく回るのに何でだ！！

「多分王子は本気だと思いますが」

「本気？というより誰に贈ったんだ？」

「報告によればカサリア王国第一王女リーナ様です」

「……やっぱりか、兄貴昨日のパーティーで彼女に釘付けになつて
たもんな」

「ええ、でもこれはかなりまずい事になると思います」

「ああ、早急に対策を立てる必要があるな。もし誰かに知られてし
まったらリーナ王女が狙われるのは必須だ」

「ですね、明日は夕食会が行われる予定です」

その言葉でさらにザリーアは眉をひそめることになる

「夕食会……なにもなければいいが」

「一応騎士団の中から魔法師を配備するように指示は出しています
が」

「ああ、それに皇帝と国王も出席する場だ。警戒は必要だろう」

ザリーアが懸念したとおりの事が起きたのはまさに夕食会の時だった
ザリーアは既に会場外の至る所に兵士を配備し魔法師は5人ばらば
らに配置していた

しかしザリーアの完璧とまでも言うほどの配備は逆に利用される羽目となる
護衛の兵士の中に暁の魔法団数名が潜り込んでいた
気づいたときには遅し夕食会でザリーアが狙われると指摘していた
リーナ姫が禁術である束縛と操りの魔法を受けていた
暁の魔法団のメンバーはザリーアが魔法師と共に魔法が行使された
と思われる場所に急いだがすでに時遅し数名の兵士の残骸だけが残
っていた

「暗殺集団だからな、やはり殺すか……」

「しかたありませんよ、顔を見られている者を殺すのは当たり前なのでしょうから」

「早急に今後の警戒体制を考え直すぞサエル、ここまでやる集団だ。何をしてくすかわかったものじゃない」

「はい了解です」

「今朝新たに情報が入ってきました」

「何かあったのか？」

「それが……離宮に暁の魔法師が二名も侵入されたそうです」

その事に愕然となるザリーア

昨日の失敗を考慮するため離宮には昨日から今日まで腕のたつ騎士団メンバーが警備にあたっていたはずなのだ

「それで被害情報は」

「離宮門番二名が殺害されたもよう、殺害方法は水の魔法だそうで

す

「そうか……サエル悪いが兄貴を呼んできてくれないか？」

「ええ、私もそれを言いたくてきたんです。その二人の殺害対象は」

「リーナ王女だろ？」

「では、しばしまってください」

王宮そして離宮はこれまで以上に危機的状況に立たされていることをザリーアは理解していた

だからこそヴェザインを呼びに言ってもらったのだ

そして十分ごろようやく扉のドアがノックされひらく

そこには顔はいつもと変わらないが何故か威圧感のあるオーラを漂わせているヴェザインがいた

「兄貴」

「サエルから聞いている、侵入者だそうだな」

「そうなんだ、しかもリーナ姫を狙ったね」

俺が彼女の名前を出すと予想通り兄貴は珍しく目を見開いて驚いているような仕草をした

「……何故？」

「何故？兄貴それ本気で言ってるのか？」

「ああ」

「……兄貴、一目惚れした相手に夢中なのはいいが周りをよく見てくれないか」

「どういうことだ？」

本気でわからないと言つ顔をするヴェザインに呆気にとられる

「兄貴、今回のリーナ王女暗殺未遂事件はすべて兄貴が原因だよ」

「……やはり花は早すぎたか」

「とうよりたった一人の女性に花をあげるなよって話！！兄貴一様次期国王だからな」

「俺の責任か……」

「そんな落ち込んでますよオーラだなさいでよ兄貴、ほらこれ」

「これ？」

「いちよう今後の対策の見直しを考えといたから今日のお茶会で説明して」

「お茶会？今日はなかったはずだが」

「予定を変更した親父がな」

その言葉で兄貴に今度は緊迫したオーラが出始めた

「そうか、彼女に謝罪しなくてはな」

「そうだね」

「あんなヴェザイン様は始めてですよ」

「兄貴の初恋の相手だからな」

ヴェザインが部屋から出て行ったあと二人でそんな言葉が交わされた

七日目 しばしの別れ

ヴェザイン様とお茶会は結局、今後2日間の私の行動制限と帝国の対策説明で終わってしまった。

まわりを見れば、護衛の兵士がざっと20名いたので、それほどまでに帝国側が自体を重く見ていると見ていいだろう。

そして私の行動制限を儲けることは、私は帝国でも誰かに狙われていると狙われているってことよね。

ヴェザイン様に気付かれないようにそつとため息を吐く。

「もう一度言っておきます。リーナ姫、あなたが部屋に戻ったら護衛がいると思う、基本外出は一時間程度にしてもらいたいとその際には護衛同席の元でお願いしたい」

「はい……」

護衛か、前にもお父様に付けられたことがあったけど、兵士の方で堅苦しい人間が多いのよね。

女性が護衛ならいいのだけど

「……すまなかつたな」

「はい？ ヴェザイン様、二回も言わずともよろしいですよ」

「いや、すべては俺の責任からだ。……こついうのは言い慣れていないのだが」

「？」

一呼吸置く

「必ず守って見せるからな」

「……はい」

やばい、なんかベタなセリフなのに、この人が言つと妙に決まって見えるよお

おゝ、私よ。この胸のドキドキを抑えろ、彼に聞こえちゃうじゃないか
私は、何故かその場にいるのが耐えられなくなり、顔がとても熱くなるのを感じながらヴェザイン様に礼をしてソフィアと大庭を後にした。

「おもしろかったですよリー」

「やっぱり笑ってたのね？」

離宮の廊下を歩きながらソフィアを目尻に見ながら言った。

ソフィアは、まだ笑い足りてないのか、笑うのを耐えるためにニヤニヤとした顔になっている。

ニヤニヤしながらも、何故ソフィアは可愛いんだろうか。

もっと、ソフィアが変な顔だったら笑ってあげるのに！

「だって、あの王子様のベタなセリフ！ それに顔を真っ赤に染めるリー。笑わないほうがおかしいですよ」

「だ、だって」

「もしかして・・・ヴェザイン王子の事好きになりかけてたりして」

「・・・そんなわけないじゃん」

私に限ってそれはないよ

そ、そりゃあ。何故かあのベタなセリフでキュンときちゃったけどさあ

「でも、脈はあるみたいですね」

「ないって」

「へ〜。でも、あの王子の方はどうかしらね」

ソフィアの見立てでは、すでにあの王子はリーに気があると見てい

た。

「そんな事どうでもいいし！」

「そうですか？」

いじられているリーナは、恨めしそうにソフィアを見つめる。

しかし、ソフィアはそんな程度の視線では、怯まないのを思いだし、足の速度を早めて部屋へと向かう。

「今回リーナ様を護衛することとなった王宮魔法騎士団第11部隊所属のイール」サバイルであります」

「同じく今回護衛をすることになりました王宮魔法師団第1部隊所属のセネス」ミチュアです」

彼が言っていた通りに、帰ってきたら部屋には二人の男女がいた。

その二人は私が部屋に入ると同時に私の前で膝をつき自らの名前と所属場所を名乗った

彼の配慮なのか、一人は女の人が混じっている。

なんだか男の人は、堅物そうな人で女の人は、なんだか友達になれそうな感じだった。

「はい、ヴェザイン様から聞き及んでおります。あと2日間だけです。がよろしくお願いします」

「2日間？」

「はい？あと2日間です。よろしかったですよね？」

「え、ええ。」

「はい、そうでした。あと2日と・・・」

なんだか2日以外にも言いたそうだな

もしかしてこの二人はヴェザイン様を私をお選びになるかもしれないということを知っているのかも

護衛の二人はこれから2日間外出以外は私の部屋の扉前にいるそうだが、でもこれって言い換えれば軟禁状態なのではないかな？

でも一時間は外に出てもいいって言われているから違うか・・・
でも二人ずつと扉の前で護衛なんてつかれないのかな？
昼間の間は部屋で休憩とってもらおうか
私には災厄の魔女って幼なじみがいるし、なにも心配はいらないん
だけど

あとは私が単独行動さえしなければね

「ねえソフィア」

「なんですかりーナ様？」

「暇だねえ」

「そうですねえ、外出もなるべく控えなければなりませんし」

「なんだか一気にやる気がなくなつた気分だよ」

「あの護衛の方達もいることですし迂闊にダラけるわけにもいきま
せんし」

「そうだね」

ソファーに寝っ転がりながら話をするリーナと椅子に座りながらの
んびりと紅茶を飲んでいるソフィア

ダラけてはいけないと言つときながらダラけている二人

外出はなるべく控えたほうがいい

ソフィアの言った一言はリーナにとって暇な時間を大幅に増やす結
果となっている

当初の計画では後の2日間は離宮にある図書室でのんびり本を読ん
だり中には猫たちと戯れる計画だった

それこそ聞いていれば暇つぶしにもならないじゃんと思うがやって
みると案外時間を早く感じる事ができる

時刻はすでにお昼を回っていた

「あと何日だっけ」

「あと一日と三時間ですよ」

「そっか、あと一日で帝国から家に帰るんだ」

「長い一週間でございましたね」

「ございましたも」

「ですが王子はあなたを選ぶとおっしゃったのでしょ？」

「そうなんだよね、だから二週間後にはここに戻ってくることになるけど」

そう言ったら今度こそソフィアとはお別れになるかもなあ

私はのんびりと椅子にもたれかかって紅茶を飲んでいる彼女を見るお別れになるかもと考えると寂しく思った

「大丈夫ですよリーナ、私も一緒にいますから」

私がソフィアを見ていると突然彼女が言い出す。

もしかしたら二週間後には別のメイドさんがここにいるかもしれないなと思っていた私は彼女の言葉に驚いた

ソフィアは私の専属のメイドさんだけど彼女にも生活があるだろうしもしかしたら妃に選ばれてしまった時には最低でも、1年間は自国であるカサリア王国にはたとえメイドであっても戻れないのだ

私は実際、二週間後には高齢のメイドさんを連れてこようかと考えていたからその考えをまさかソフィアに知られていたとは・・・

「リーナのことはよくわかるのよね」

「さすが幼なじみさまだ」

「というよりリーナがわかりやすい表情だからよ」

「善処します」

もうすこし表情を変えられるように頑張ろう

のんびりとした一時は過ぎていき、ついに帰国の時となる。

ヴェザイン様は一度も私の部屋には来てくれなかった。

来る理由もないからだと思うんだけど、いや、逆に来てしまったら更に厄介事が増えるかもしれないわ

それに彼は今回の事件の事で忙しくなっているのかもしれないし

護衛の二人もこの2日間休まず護衛してくれて危ない目に合わずにのんびり過ごすことが出来た
多少行動制限があつたから暇になつたけど、護衛の二人と仲良くなる事が出来たし

女の魔法師さんはなんだかソフィアと意気投合しちゃつてちよつと不安要素が出来ちゃつたけど

「リーナ？荷物はまとめましたか？」

「うん、あまり多く持つてこなかつたからまとめるのは簡単だつた」
「今度来るときはもつと持つてきませんと」

次か・・・

今まで言葉に出しても何ともなかつたけど、私つて今妃候補ナンバーワンなんだよね

いやいや、でしゃばつちやいないけど私の勘では、彼とまともに話したことがあるのは私だし、彼に心配されたのも私だし、彼の表情が少し変わったかもしれない場面に出会つたのも私だしつて何言つてんだらう私は！

でもでも、もしかしたら帝国の妃になつちゃうかもだよ。

面倒ごとが嫌で変身なんて能力をもらつて私を偽つたけど、結局面倒ごとに巻き込まれちゃつてるんだよねあ

でも、妃つて事はヴェザイン様の奥さんつて事だし悪い気もしない彼つてなんだか頼りになる人みたいだし、かつこいいし、あれ？

もしかして私つて結構運がいい女の子？

どうせ王族なんだから面倒ごとに巻き込まれる運命なんだつたら本気で彼を好きになつてみてもいいかもしれない

「リーナ？そろそろ行きましょう」

「はい」

もし本当に彼が私を選んでくれるなら私は・・・

「最後まで護衛をしてくれてありがとう」

部屋を出ると2日間私の護衛をしてくれたイールさんとセネスさんが待っていた

馬車は離宮から出て王宮の前に止めてある

そこまでの道のりまでが彼らの護衛の任務だそうだ

「いえ、貴方様を守のが我々の任務ですの」

「それにリーナ様とソフィアちゃんと話したかったし」

「セネス!!」

「はいはい、これは仕事仕事」

性格はイールさんはなんだか石頭で頑固、セネスさんはお姉さんって感じの人でイールさんとはなんだか微妙な関係みたい

「まあまあイールさん、私は普通に話してくれるセネスさんが好きですし」

「そうですか？ですがわれわれは」

「はいはい、いい加減うるさいからイールは黙ってて」

「俺は・・・」

「ごめんね二人共、護衛の一人がこんな人間で」

「わかる!!わかるよセネス、私の所にもこんな性格の人がいるから」

「やっぱり!!どこにでもいるのね、イールみたいな性格の奴って」

「な、なんで俺がせめられてるんだ」

イールはセネスとそれに同調したソフォアの攻めに困惑を隠せないようだ

私はそんな二人の様子にイールに同情の念を送つといた

イールは堅物だけど二人以上の言葉攻めに耐えられないらしい

昨日からソフィアとセネスは連携してよくイールをいじめている

「でも本当に気をつけてください、帝国領では気を抜かないようにお願いします」

「ソフィア、今度はもつとおもしろい魔法教えてね」

二人共別々の言葉を言って私たちの馬車はカサリア王国へと向かっていったのである。

私の目の前にある物を見たとき10秒ほど身動きがとれなくなっただなんてすごい芸術作品だ！！

見ているとこの国のレベルの高さにおどろくなあ
ソフィアなんて固まって動けなくなちゃってるし
数多の綺麗なガラス細工の中でソフィアの見惚れている姿は見ていて面白い

時々こちらをみたり棚に飾ってあるガラス細工を見たりしている

「普通に見たければ私に気にせず見てもいいよ？」

ソフィアは一瞬こちらを伺うように見つめてきて

「いえ・・・私はあなたの護衛をしますから」

ちよつと頬を赤くしながら素っ気なく言う彼女の態度がさらに笑いを引き立ててくれた

「わ、笑ってないでお土産買うなら早く買っちゃってくださいよ」

笑われたのが気に入くないみたい、顔を赤くしちゃって

「うん、所でフィー？あなたこの赤いコップと白いコップどっちがカーリナに合うと思う？」

「カーリナ様にですか・・・こっちの青が似合うと思うけど・・・」
うん、完全に私の候補から選ばなかったね

「カーリナ様は青い色が一番好きなんですよ？知りませんでした？」
知りませんでしたとも

あれですね、いつも交流が多かったはずなのに相手の趣味とか好きな物とか一切知らなかったですね

妹について何にも知らないなんて私って一体・・・

「落ち込まないでください、それより早く決めて」

「わかつてますよ」

少しは親友を労ってくれないかなあ

初めて見るガラス細工を手に取りうか取らないかで格闘中のソフィアを見ながらちよつと愚痴を言ってみる

私は帝国を出るためのんびりと馬車で移動していた例にもよらず馬車のあまりの揺れに気持ち悪くなつたので少し休憩を取らせてもらっていた

風を辺りに窓を開けるとそこには商店街とおぼしき所を発見そこで王国のみんなにお土産を買って帰ろうって思つて今に至る帝国で有名な物の一つにガラス細工が存在する

あまりにも鮮やかな彩りに多くの国で帝国のガラス細工は有名になっている

わかりやすく言えばM I D E I N J A P A Nのような存在なんだ王宮にも沢山帝国のガラス細工はあるんだけど多分本人専用のコップは持つていないだろうから買ったなら喜んでくれるだろうなうれしそうに微笑む姿を想像するとちよつと楽しみになってきたよ

「ソフィアも何か同僚に買っていけば？」

リーナって人脈広いから沢山買うだろうし、もしかしたら何か買ってきてとか言われているだろうし

「そうですね、妹とか同僚とかに買っていこうかしら」

あゝフィールちゃんにか

やっぱりソフィアも妹が好きなのかなあ

「ソフィア、私前のお酒屋でお父様とお母様にお酒買って帰ろうかと思つてるから先に行つているから買ったら来て」

「ですが、リーナ一人にするわけには」

「大丈夫だよ、私は今みんなが知つているリーナじゃないからさ」

「そうなんですが・・・」

さつきからやたらと周りを気にし始めている

回りに知り合いでもいるのかな？いないと思つけど・・・

「まあいいや、私先に行つてるね」

「あ！？まつてリーナ・・・」

ソフィアの言葉は最後まで聞こえなかったけど目の前のお店だし危なくなったらソフィアは気づいてくれるだろう
それにいざとなったら自分の身は自分で守れる・・・と思うし

ガラス細工のお店から見た限りでは普通のお店だったけど目の前から見ると貫禄ある店だな

看板には夜気側・・・やきそば？

全体を見ると昔の古いバーを思い出させるお店だった

なんともツツコミ所の多いお店だな

なんか中が薄暗くて入り辛いんだけど

中に一歩一歩慎重に入っていくとレジの前には大柄の頬に十字架の傷を持つ男が座っていた

ここって傭兵とか雇ってるお店なのかな？

「なんだい嬢ちゃん、ここはお酒しか売ってねえぜ」

どうやらお酒屋だったみたいだ

「お土産にお酒を買いたくて」

でも別の店にしようかと考えてます

「土産？んだつたらこの200年物のワインなんてどうだい？」

ワインってお酒の一種なのかな？飲んだことないから分かんないや

「200年・・・高くないんですか？」

「だいたい金貨100枚つて所だな」

「・・・あのおじさん、私まだ子供ですから」

店主もどうやらツツコミ待ちの人らしい

「んだよ、つまんねえな。んじゃあこのホワイトブルーなんてどうだい？麦を使ったビールなんだ。この帝国じゃあこのお酒を知らねえ奴は大人じゃねえつてくらいに有名な酒よお」

よくわからんけどおいしいお酒つてことだよな？

「それじゃあそれいただきます」

「おう、金貨1000枚だ」

「どこか他の店に行きますんで」

「ここはボツタクリのお店だったらしい

「冗談だよ嬢ちゃん、銀貨10枚だって」

「じゃあいただきます」

お金を払い顔に似合わず気前のいいおじさんは瓶に入っているお酒を割れないように新聞紙に包装袋に入れて持ち易いようにしてくれた、おじさんありがとう

「また来いよ」

「わっかかりました」

最後にはなんか打ち解けちゃったなあ

そういえば結局ソフィアは来なかったけどどうしたんだろうか？

そんな時だった先ほど私がいいたお店の前で何だか人だかりを発見

なんとその真ん中にはソフィアの姿をこれまた発見

そして私の背中が冷え額から汗が出始めているのを発見

どうしようか、変な事に巻き込まれちゃってるよ

なんだかソフィアはどうしようかこれ？って感じの表情をしてるし

ここは行くべき行かないべき？

いやいや、でも変な奴に絡まれているだけかもしれないし行った方が

そうだ、うん行こう

買ったガラス細工やお酒を落とさないように気をつけながら人ごみの中に突撃しなんとかソフィアの側に行き着くことが出来た

「ソフィア何をやってるの？」

「り、・・・リン」

リン？何いってんの？

「どうした「リン？ 彼女はだれだ？」・・・」

なんでここにこの方がいるの？

「なによりリーナの侍女が、何故ここにいる」

それはこっちのセリフですよ、なんでこんな所にこの人が彷徨いてるんですか？

暇じゃないんでしょ？

「私たちもビツクリです、まさかこの国の・・・第一王子とこんな所で会うなんて」

ソフィアと向かい合っているのは正しく私がここに来た理由である銀髪の髪で美形な王子だった

――SIDE ソフィア――

馬車に乗車してから予想通り少ししてから気持ちが悪いと言い出したリーナ

しかたがないので馬車を止めてもらい少し気分転換にと近くに丁度あった商店街に行くことにした

リーナは何故か急にお土産を買いたいと言い出したため帝国の有名なガラス細工を買うことにした

お店に入ったら棚に綺麗なコップやら皿やらが並んでいた

私は厨房に入ったことはないのですがこれほどのガラス細工を見るのは初めて見惚れてしまった

しかし私は仮にもリーナの護衛でもある、だからガラス細工に見惚れている暇は・・・暇はない

さっきから何故かリーナに笑われている

リーナは変身を解いているため私から見るとリーナは女性でも見惚れるくらいに美しかった

でもリーナはリーナ、たとえ姿が違っていたと言っても私からしたら一瞬でリーナと見分けることが出来る私だけが見分けられる

「ソフィア、私前のお酒屋でお父様とお母様にお酒買って帰ろうかと思ってるから先に行っているから買ったら来て」

なんて恐ろしい言葉を口にするんだろうか

周りを見てみなさいリーナ、あなたをキラキラした目で見ている男

供がいるのよ

止めたにも関わらずリーナってば走って向こうのお酒屋に行ってしまった

その次に男達の反応を伺っていると、「ありゃあダメだ、あそこの店に入ったら殺されちまう」「あそこは魔王がいるから行けない」「クソ、あとちよつとだったのに」

魔王・・・がんばってきてねリーナ

なんとかお土産は買うことが出来たから今度は酔い止めの薬買わなくちゃ

王宮でうつかりもらっつうの忘れてたからな

にしても運がいいなあ、すぐ隣が薬局だなんて

ソフィアは酔い止めを買いリーナが来るまでガラス細工屋の前でのんびりとしている

早く来ないかなあ

「あなたは・・・リーナの侍女の」

・・・最近聞いたことのある声が聞こえた気がするけど気のせいだろう

「おい、聞いてんのか？おい！！」

「はい？」

うるさいから声が聞こえた方を向きましたよ、そしたらここにいるはずがない人がそこにはいましたよ

「はい？」

「なぜ二回言う。それよりなぜお前がここにいる？　リーナもまだ帝国にいるのか？」

ホント、この王子とリーナって運命の赤い糸で繋がってるんじゃないだろうか

これがホントの初対面？（前書き）

前の話を結構編集していて更新がおくれました。
誤字脱字あれば、教えてくれるとありがたいです。

これがホントの初対面？

時は遡り、リーナ達が護衛と会った時。

ヴェザインは大庭を後にすると、急ぎ弟ザリーアの元に向かい。

これまでの情報を聞く

「暁の魔法師団？ あの魔法師団が関わっていると」

「帝都諜報機関の情報と、こちらの被害状況を見ればその線が妥当だろうな」

緊張が一瞬部屋を包み込む。

この部屋に一週間のすべてを報告するためザリーア第2王子は第1王子である兄ヴェザインに暗殺及び殺害未遂に関わったと思われる暁の魔法師団について話を始めていた。

「で？ 今回その魔法師団を買い取った公爵家の目星はついているのか？」

「予想でいくと南のカンザイル公爵と東のエルイス公爵だと思われる」

「根拠は？」

「カンザイル公爵は、西にあるサイル帝国の皇帝と仲がよく交流があります。今回この帝国の皇女でアリーア皇女が妃候補として来ています。そしてこれも帝都諜報機関からの情報ですが皇帝が公爵当主に、皇女を兄貴の妃にするように仕向けてくれとの依頼を受けたらしい。その依頼料が千金貨だそうだ」

「やけに高額だな・・・その情報の信憑性は？」

「おおよそ半分いや、それより少し上程度」

「次」

「エルイス公爵は、まあなんとというかカサリア王国嫌いでも有名な公爵なんだよ」

「嫌い？ パーティーでは何もなかったが」

「兄貴も気にしていたあの、リーナ王女の侍女が嫌味を言うてくる公爵の言葉を聞かないようにさせていたらしい」

なんとまあと、この資料を読みながらもエルイス公爵に呆れ果てるザリア

帝国のトップに1人であろう公爵が、公の場であったパーティーで何を考えてるんだ？

しかも他国の侍女に、嫌味を躲されるとは・・・

「バカな公爵もいたものだ」

「それで、二人の公爵は、あとの二人の公爵と違って私利私欲で動くことも多々あり、今回候補として上がったしだいです」

数秒の沈黙の後にヴェザインは答える

「二人の公爵に監視をつける、監視には一時間置きに公爵の行動を俺に報告するよう指示しておいてくれ」

「わかりました」

それから、ヴェザインはこれまでの事故を装った殺害から始まり暗殺を含め休みをとらず今回の事件を仕組んだ者を見つけるために動き出す。

リーナやソフィア達が部屋でのんびりしている間も、監視の報告を聞きながら目立った行動を起こさない二人の公爵のどちらが動き出すのか警戒を怠らない用になっていた。

そして時は流れていき、最終日となった

「今日で、・・・帰ってしまうのか」

出来ればもう一度でいいから会いたかった
いや、彼女は多分迷惑がるだろうか？

この一週間を振り返ると、俺は彼女とまだ少ししか話してもいないし、親しい間柄にもなれてない。

これまで女性と、コミュニケーションを取ってなかったことが不味かった。

今度彼女が来る時までには、何か話題を作っておこう。

そんな事を考えている時だった、部屋をノックする音と共に弟ザリアが部屋に入ってくる

「兄貴、姫は全員出発した。全員の姫には一応魔法師を一名ずつ配備させるように指示もしておいた」

「わかった」

「リーナ王女の所に一度も行かなくてよかったのか？ いや、いけない理由はわかるんだけどさあ」

少し気まずげに話す弟

「いいんだ、あと一週間もすればまた会うことができる」

「やっぱり彼女を選ぶのか」

「あとは、彼女の気持ちしだい・・・かな？」

次々と王宮から出て行く馬車を見ながらヴェザインはそう言った。

「そうそう、ザリア」

「なんだ、兄貴？」

「最近の若い女性が好む者ってなんだ？」

「若い女性？ 誰かに贈るのか？」

首を傾げて聞いてくる弟に、押し黙るヴェザイン

「・・・贈りはしない、俺は会話をするには最近の流行とかいろいろしつて置きたいなと・・・な」

「深くは聞かないけどガンバレ、若者が多く集まる場所なら中央商店に行けばいいんじゃないか？ あそこは結構賑わってるしいろいろな物が置いてあるからな」

「中央商店か・・・」

「兄貴？ 一応護衛は連れて行ってくれよ」

「早速行ってみるか」

ザリーアの言葉を最後は聞かずに、立ち上がると小走りですべて部屋を出て行く

「・・・ここまで、兄貴の行動力を上げるなんて。リーナ女王も

これから大変だな」

苦笑しながら、走って行った兄を見つめる

「なんだか、この一週間で積極的になったのかな？」

「ここは、なんだ？」

目の前にあるのは、メイド喫茶と書かれた看板があった。なんでもどこかの国の作家が書いた喫茶店を真似て出来た店らしい

メイドって、あれか？ 侍女のことなのか？。

しかし、なんとまあ動き難そうな服だな、看板の間に立っている女性が多分そのメイドって言うものなんだろう

女性が着ている服は、見るからに服の生地はよさそうだが、あまり侍女にはお薦め出来そうにないな。

あれでは、掃除もし辛いだろうに。

今、流行の物を聞いて来てみたが・・・こんな所に入っても彼女に話す話題が見つからない

ヴェザインはザリーア助言の元、若者が多く集まる王都の中央商店へと来ていた。

王宮からもさほど遠くないこの場所で、ヴェザインが最初に見つけたのが長い行列を作っていたメイド喫茶と書かれた看板だった。行列のほとんどが男性だったのにもヴェザインはビツクリした、彼の頭の中では喫茶店と呼ばれるところは女性が好む場となっていたからだ。

さてさて、そんなヴェザインはメイド喫茶を素通りし更に奥へと入っていく

なにかおもしろい物はないものか

見渡す限り、帝国の特産品を売っている店ばかりであった。得におもしろそうな物もないし・・・

「おい、きいたか?」「ああ、聞いた聞いた」「なに? なにかあるの?」

なんだ? なにかあっちにあるのか?

何故か急に、ぞろぞろと男女問わず若い年代の者が、中央商店の奥の方を目指していた

「なんでも、どびきりの美女が二人、ガラス細工店に来てるんだとさ」

「美人? そんなに騒ぐほどなのか?」

「いや、まさに絶世の美女だよ。特に茶髪の子がすごい綺麗なんだとさ。聞いた話じゃ、侍女連れてるからどっかの貴族様か妃候補の姫じゃないかって噂だぜ」

「まじかよ、見るのが楽しみだぜ」

・・・どこかの姫? 俺も王子だから、一応行ってみるかな

ヴェザインも王子の前に男だったのです。

「あなたは・・・リーナの侍女の」

俺の最初に出てきた言葉はそれだけだった。

美人がいる、いや他国の姫がいるかもしれないと思いここに来たが居たのは予想と少し違い、リーナの侍女がガラス細工の前に立っていた。

確かに言われてみれば彼女は美人だった

でも、彼女が居るってことはもしかして・・・

俺が質問しようとした所、どうやら侍女は俺の事を無視しようとしているらしい

なんか腹が立ったので、つい大声で「おい、聞いてんのか？おい！！」と、俺らしくもない大声で喋ってしまった。

侍女も、もう俺を無視できなくなったらしく「はい？」などと、疑問形でこちらを振り向く。

「はい？」 いやいや、二回も言わないでいいからな？

「それより、何故お前がここに居る？ リーナもまだ帝国にいるのか」

もし、そうだったら、もう一度会いたいんだけど

侍女は、沈黙すること数秒後

俺も興奮気味だった自分をなんとか押さえつけ、冷静になって辺りを見渡すと俺たちのまわりは何故か人だかりが出来ていた。これを俗に言う野次馬って言う者たちなんだろう

そして、そんな時だった。

後の方から「すいませ〜ん」と言う声と共に、高級そうな服を着ている女性が、手に夜気側と書かれた手提げ袋とガラス細工を大事そうに持ちながら人ごみから、俺たちの方に来た。

侍女は彼女の事をリンと言っている。

「・・・彼女は誰だ？」

呆然と、俺を見ている彼女は茶髪の髪に卵型の顔とクリクリとした瞳で、誰もが見惚れるくらいにかわいらしい、いや美しい女性だった。

・・・って、いやいや、俺は見惚れただけで別に彼女の事を一目惚れしたわけではない

そんな、ラブストーリー的展開ではないよ

でも・・・どっかで見たことある感じだな。いや顔でなくてオラ？ 雰囲気なんだか誰かに似ている気が・・・

それは、ひとまず置いておこう。それよりも

「リーナの侍女が、何故ここに居る」

「私たちもビックリです。まさかこの国の・・・第一王子と、こんな所で会うなんて」

俺もビックリだけどな。

何より俺は、リンと呼ばれた茶色の髪と瞳を持った女性が気になり始めていた。

私の家族（前書き）

誤字脱字あれば、教えていただけるとありがたいです。

私の家族

久しぶりに私の家は、一週間前に見たときと同じで輝いていた。

ここは、私の生まれた場所であり、原点でもあるカサリア王国王宮王宮にある高い門をくぐり、久しぶりに城壁を見ると、帰ってきたなあって感じがするよ。

帰ってきた私を迎えたのは、たくさの王宮で働くメイドや執事、あと二人の妹と弟だった。

お父様とお母様は会議があるとかで来れなかったらしい。

馬車を降りてすぐに聞こえてきた声、前を見ると走って来る、私のかわいいかわいい妹だった。

「おねえちゃんおかえりなさい」

「ただいまリナ、ちゃんとお兄ちゃんと仲良くしてたかな？」

リナとは、カーリナの愛称。というか略した言い方、いやなんか言にくいし

私の部屋は王宮の中にあるんだけど、帰ってきた最初に、お父様いや国王に一週間について報告しなければならぬ

笑顔で私を引つ張り王宮内へと、導くりナ。

「それがねえひどいんだよ兄様ってばね」

「あ！ リナ、なに姉様に話そうとしてんだよ！」

「へへ〜んだ、兄様なんておねえちゃんに怒られればいいんだもん。それでね？ ねえさまあ」

「ちょ！ 悪かったって。だからそれだけは・・・」

帰ってそうそう、下の兄妹達の登場が早い。抱きついてくる小柄なりナは、とつてもかわいくて見ていると抱きしめたくなっちゃう。

変身前の私と同じで、二人共、髪と目の色が茶色で、美形だったりするんだよね。

妹は、今年で11歳だったと思うんだけど、身長140センチほどで、今日はポニーテールの髪型。

お持ち帰りしたくなるほどの、驚異的なかわいさを持っているのが家の妹なのです。

「そ、それに、あれはお前の所為でもあるんだぞ!」

「兄様って、男のくせに女に責任押し付けるんだ。ねえさまどう思う?」

「うぐ!」

彼女の一言で、何も言い返せなくなり黙りこくってしまったザエリス。

妹の言葉でそんなに衝撃受けるなんて、将来が心配だよ、何気に強い口調な妹も心配だけど。

弟のザエリスは、身長153センチほどで、12歳で平均ほどの背丈。

髪と瞳も茶色で、美形で、12歳なのに王子オーラ全開な子。

あ! でもリナの言葉でよく落ち込んでるから弱虫な王子かな?

未だ、何も言い返せず黙り込んでいるザエリスにしびれを切らせたリナは追い討ちをかけるように言葉を続ける

「ふん! 兄様って男のくせについて言うとき黙っちゃうよね。それってなに? その方が男らしいとかバカなこと考えてるの? 言ってみようか? 兄様って弱虫で自分の事を何か言われるとすぐ言い返すくせに、いざとなるとだんまりで、ハッキリ言っただけ悪すぎです! そんなんでよく王子とか、名乗ってられますよね? 恥ずかしくないんですか?」

「な、・・・お、俺は」

「ふん! 凶星指されて動揺してるじゃない!」

勝ち誇ったかのようにリナはザエリスを見ながら笑っているあれ? なんだかどんどんリナの性格が・・・

「こらリナ！　なんてこと言っんですか」

私がある場所を見つめていると、私の親友が二人の、特にリナの言動を見兼ねて仲介役にはいる

「そ、ソフィア姉様。でも兄様が！」

「リナ！」

「は、はい……」

さすがソフィア、一括しただけでリナを沈めちゃったよ

「さすが魔女だ」

先程まで、妹の言葉で縮こまっていたザエリスが、ソフィアの一括に感心したように話す。

「なんか言った？　妹の言葉に押し黙ってるような野郎がさあ」

「ウグ！」

「それに、リナもそうです！　淑女の嗜みをつい一ヶ月前に教えたばかりのように、兄に向かって何て口の利き方をしているんですか」

「「「すいません……」」」

なんか、遠くから見るとソフィアが二人のお姉さんっぽいよね
ソフィアは、リナとザエリスにとって私と同じ姉のような存在だと思っ。

「それに、リー！」

「は、はい」

止めとばかりに、私に指を指してくる

「あなたも止めに入りなさい！　なに後でニヤニヤしてるんですか。見ていて気持ち悪かったです」

「その言葉が一番グサツてくるよ」

ソフィアも、淑女の嗜みを心得てるんでしょう？　直球ストレートでそんな言葉ぶつけないで……

なんか、後で妹と弟も、二人で抱き合いながら震え上がってるから

さ。

なんとも、言えない光景になっちゃってるんだよソフィア……

「……あれ？　なんだか私が三人を苛めてるみたいじゃないですか」

今頃気がついたのかよ

私のお父さん、つまりは王国の国王様はなんだか理想的なお父さん何だよ

今年で44歳で、国王の座に就いたのは10年前、なんでも歴代でもっとも若い国王何だったさ。

顔はやはりと、言ってもいいくらいに美形、性格は家庭的なお父さんと、働き者のお父さんを組み合わせたような性格で、私も憧れにしている男性……なんかヴェザイン様がお父さんの雰囲気似てる。

恥ずかしながら私は少しファザコンが入っているのかもしれない。

そして、そんなお父さんを射止めたのが現在31歳のお母様、でもすごいよね？　だって年の差が13だよ？　普通ありえないよね！

しかも、お父さんが結婚したのが25、ということはお母様は12歳ほど若くてことになる

そう考えると、あれ？　お父さんってロリコンってことになる、まして私、そこまで考えるんじゃない。お母さんが懐妊したのは14歳のころ……やばい否定できなくなってしまった。

「どうしたんですか姉様？」

「なんでもないよザエリス」

この子には、お父様と同じよにならないことを願いたい

私に寄り添うように歩くザエリスを見ながら、切に願う私であった。

「頭をあげよリーナ」

ちよっと、やさしげな声

言われたように、頭を上げ前を見ると威厳たつぷりな、最近ヒゲを生やし始めたお父様が座っていた。お母様はそんなお父様に寄り添う形で座っている。

「王女リーナ、ただいま帝国より帰ってまいりました。お父様もお母様お元気でなによりです」

「ああ、……まあひとまずお前が怪我一つ負わずに帰ってきたことは大変安心できた。リーナもここは王族の王室なのだから気を楽にしる」

「はい……」

ここは、王族だけが入ることを許される場所の一つ王室

お父様が結婚してすぐに作ったプライベートルーム、作った理由が王宮内だとべったりくっついて居られないからと、作った部屋だったりする。

「では、お父様？ そろそろヒゲはお切りにならないのですか？」

「な！？ 帰ってきて早々父親にダメ出しか！？ それに、こ、こちの方にがかっこいいだろう！？」

「ほら私の言った通りじゃない！！ もう聞いてリーナちゃん、サリーったら私がヒゲなんて生やさないでって言ったら、こっちの方がかっこいいんだ！ って言って切らないのよ。他の大臣とか苦笑いしながら見ているも気がつかないの！ サリーにはヒゲなんて似合わないのに」

「お母様の気持ちはよくわかります。確かにお父様は美形ですが、顔はやさしい美形なので逆にヒゲなんて生やしていたら気持ち悪くなってしまうからね」

あ、なんかお父様がショック受けてる。石みたいに動かなくなつたよ。

「いいのよリーナちゃん、娘に気持ち悪いって言われてショック受

けているだけだから」

「そうですね」

さすが、お母様。お父様の事は一番よくわかってるのね
さてさて、お父様の紹介をしましょうか。

お父様は、ザリィカサリア、お母様はサリーって呼んでるの。
身長は187センチで、なんだか44歳なのに皺もなくつやつや
の肌と、美形な顔を持つ国王様です。

次にお母様、31歳で名前はアリーィカサリア。お父様はアーリ
って呼んでるの。

身長は169センチで、これまた美形な三十路を越えたのに25歳
と語っている王妃様

お母様が初めにアピール？ してから、次第にお父様も惹かれてい
ったそうだ。12歳の子に惹かれないでよお父様・・・
小さいころに聞いたお母様の、「いい！ 好きな相手には縛って即
成事実を作るのよ！」と、娘に向かって大声で言っていた姿を一生
忘れることはできないだろうな。

冗談であってほしい所だけど、お母様の宝箱を昔見たとき、束縛口
ープと呼ばれた魔法具がお母様の宝の一つになっていたことが、何
故か頭に残ってしまっている。

今度、結婚した理由をお父様に詳しく聞いてみようかな？（ニヤリ）
まあとりあえず報告を終えた私は、荷物を持って自室へと戻った。
ソフィアは、今日はとりあえず家に帰るのだそうだ。

彼女もいろいろと苦労があるのだろう、この前はお見合いの話を母
さんが持ち掛けてきたとかため息ついていたし。
ホント、私のまわりは苦労が耐えないねえ

後日

朝食を、家族で取ったときお父様はヒゲを綺麗に剃ってリーナ達の
前に現れたそうだ。

久しぶりの光景（前書き）

誤字脱字が、ありましたら教えていただけるとありがたいです。

久しぶりの光景

久しぶり、・・・

王都から離れて、久しぶりに見る下町は、私にとっても気持ちいいものでした。

私の実家は、下町のとある小さな小さな店にあります。

古くから、私の一族は、この国の下町であるお店を営んでいました。現在第67代目を、家の父さんが引き継ぎ伝統を守っています。

下町は、王宮とはまた違った清々しい空気に包まれ、私は、このこの下町の空気が大好きです！

私の親友の父・・・国王様は、就任早々国の民に、とても有意義な政策を取ってくださっており、つい30年ほど前まで颯爽としていた下町が今では耳を塞ぎたくなるような、とても活気ある街になっています。帝国とも負けてないかな？

・・・さて、そんな私ことソフィア「アーシファムは、一週間ぶりに下町の空気に浸っている所です。

「いつ見ても、・・・ボロいな、うん」

代々引き着いてきた我が家は、改装をしたのがおよそ30年前。

それまで、30年間このままの家でいたため、横にある支え柱の中央を横にヒビが入っていて、屋根の上は雨を防ぐ瓦が、ほとんど割れてまさにボロ・・・幽霊屋敷と化している

・・・幽霊屋敷で、改装したら儲かりそうだな。

と、いうか「何故崩れない、我が家よ」であった。ただ今時刻昼の12時になっているので、帰ってくるのには丁度よかった。多分家族は、居間で昼食を取ってるだろうし私のお腹空いてきたから

お店からは、直接行かず裏口に回ってはいる、我が家の鉄則だ裏口に回る、薄暗いそこには黒い猫がいた。

「ミャーコ、元気してた？」

私の家の黒猫、珍しい猫なんだよねミャーコって。

何故か私が小さい時には、既にいたこの子はもう何かわからないけど、15才は過ぎているはず。

黒猫だから寿命長いのかな？

黒の色は、世界的にとても珍しい色。

神話では、女神が大地に降臨なされた時に、その女神様の髪が黒だったそうだ。

そして、黒をほとんど持っている生物がいないほど貴重なんだ。女神の神話や、その他にもたくさん神話、伝説でそのどれもに黒が出てくる。

だから、黒を持っていると言うことだけで、危ない目に合うこともある、リーナと居て今まで20回ほどリーナの黒髪を狙おうとしてきた輩がいたほどだ。帝国ではあまりそういうのはなかったのが幸いだったけど。

「ミャーコ？　あまり外に出てはダメよ。誰かに連れていかれてしますから」

薄暗い玄関で、横になっていた黒猫ミャーコを抱き上げ、ミャーコを連れて家へと入る。

「ただいま、帰ってきたよ母さん」

お土産と猫を持って家に上がると、案の定居間で、母さんと妹のフ

イールが、焼き魚を食べている

「あ、おかえりなさいソフィア、早かったのね」

「お帰り姉ちゃん、お土産買ってきたよね!？」

「うん、今日は休みをもらったの。お土産もほら、買ってきたから一目散に、私・・・ではなく、お土産に飛びついてくるフィールに苦笑しながらも、帝国で買ったガラスのコップを渡す

「すごい!! なにこのガラス! すごく綺麗なんですけど」

「うん、そうだね。なんたってあの帝国のガラス細工だから」
「どうやら高評価をもらえたらしい」

「なんだ、食べ物じゃないのね。つまらないわ」

そして、中年女のむかつく返答も貰ってしまった。

「あ! そうだった。ソフィア?」

母さんは、何かを思い出したようで、居間にある机の引き出しから封筒をとりだした。

まあお決まりのアレなんだろうな・・・

「お見合いの話なんだけど」

「母さん、私自分でそういうの探すからいいの!-!」

なんで、この母親は・・・

「でもねえ、歳が歳だし、そろそろ落ち着いたほうが」

「まだ、私17! おかしいよね!？」

結婚って、普通16から、20までが普通だ!!

まだ3年あるし、まだ早いつて

「早いに越したことはないと思うけどねえ」

「母さん、結婚は好きな人としていから見合いはいいわよ」

まあ母が心配になるのも当たり前なのかもしれない、何せ私は魔女と言う異名からあまり付き合いのある男性が少ない

母さんも、本当に心配してるんだろう

「・・・まあ、じっくりとね」

「うん」

帰って早々、見合いの話でゲツソリになった。

「姉ちゃん、アデイルはどうだった？」

まだ焼いていなかった魚を、焼きのんびりと魚を食べていたソフィアに、テーブルに手をつけて興味津々に聞いてくる妹

「ん〜、私はメイドだから忙しかったわ」

「別に姉ちゃんの事なんて、聞いてないよ。王子様、かつこいいんでしょ？ 王子様だもん！ かつこいいはずだよね！？」 どうでもいいと、きたか・・・

我ながら、最近妹の口が悪くなってる気がする。

「かつこよくは、あつたわ」

「そうなんだ、やつぱりそうなんだね。お約束だもんね、じゃあ、やつぱり笑顔とか輝いて見えたりした？」

笑顔・・・なんて似合わない言葉なんだあの、表情をまったく変えない顔

あれが笑つたら・・・恐いなあ

「どうしたの姉ちゃん？」

「・・・なんでもない」

「母さん、今日は私が店番は・・・」

「あんたがやるんだろう？」

「そうなんだけど・・・、母親としては、長旅で疲れてる娘に対して心配りというか・・・」

この母親には、娘に対する思いやりがないのか・・・

「あんたがいないと、家の商品がねえ」

「はいはい」

私の家は、代々魔法具を扱っている由緒ある魔法店

しかし、店はボロボロ

「あんまり客来ないけどねえ」

ボロだけに収入もボロボロだけだね

最近じゃあ、近くにデツカイ魔法道具専門店なんかできちゃって、赤字がかれこれ5年は続いている、家の収入源の殆ど私の給料だし。それでも、店を続けてるのはある意味凄いなと思う。

「帰ってたのか」

「父さん、昼食べた？」

「もうそんな時間が？」

母さん、父さんの存在を忘れてたな。

「私、店番してる、魚まだ残ってるから食べてきなよ」

「そうか？ すまねえな。帰って早々・・・何感動したような顔してんだよ」

「そうだよね、普通その言葉が来るはずなんだよね。やっぱり家の父さんはいいよ」

父さんは、感動している私をスルーすると

「頑張れよ」

ガッツポーズを決めていた

やっぱり父さんは、嫌だな・・・

「父さん、ダサイ・・・」

『わあ、ソフィアだよ。みんな、ソフィアが帰ってきたよ』

『ホントだ！！』 『わあ、いい、ソフィア』 『魔女だ』 『お化けだ』

『化け物だ』

「まで、お前ら！！ 最後はまるつきり悪口だ！！」

店に入ると、歓迎の声と、最悪の声が室内に響いてきた。

しかし、部屋のどこにも誰もいなくて、居るのは私一人だけ

『ソフィア、どこに行っていたの？』

『そうだそうだ！ ソフィアは僕達と遊んでくれなくちゃあ』

『『『『そうだそうだ』』』』

何故私が、構わなくちゃいけない

「うるさい！ 少し静にしなさい。 あんたたちの声は頭に響いてうるさいのよ」

『魔女が、怒ったぞ！』

『『『『怒った怒った』』』』

う、うざい

目には見えない、しかし今私に喧嘩を売っている、子供のような声。心霊現象でも、怪奇現象でもない。

声の主は、人間の肉眼では見ることの出来ない、精霊と呼ばれる類いの者だ。

精霊は、万物全てに憑いている、私の店が魔法具屋な為に、店内には沢山の精霊が住んでいるみたいだ。

精霊は、人間の魔力を少し貰うことで、生き長らえることができる、もし仮に魔法具に憑いている精霊が、死んでしまった場合、魔法具はその持っていた魔法の力を失うことになる。

魔法具は、純度の高い魔力を好む、精霊は私の魔力が一番好きならしい。

小さいときから、精霊の声が聞こえる私は、いろいろと苦労が多かったんです。

なんせ、24時間365日ずっとうるさい声を、聞き続けていましたから。

『それじゃあ、久しぶりにごちそ・・ソフィアに会えた嬉しい気持ち、知ってもらうことができた所で』

今、こいつらご馳走って言ったよね！

『これまた、久しぶりに、僕たちのご馳走から高級魔力をもらおう

姉様とおねえちゃん

おねえちゃん

おねえちゃんは、私たちに何か隠していると思う

そう思ったのは何時だろう？ ソフィア姉様と何か不思議な会話をしているのを聞いてしまった時だろうか？ 寂しいけど、いつか聞けるといいな。

おねえちゃんは隣の国のアデイル帝国の妃候補として一週間行ってしまった。

今まで、おねえちゃんを見てきて、変わった人だなんて、おねえちゃんなのに思ってしまう

11歳で、いい加減あね離れしなくちゃいけない時期なんだけど、おねえちゃんに会ったら甘えずにはいられない

なんでだろう？ おねえちゃんには、いつまでも私を見てほしいアデイルなんて所に行ってほしくないし、結婚なんて……

これは、思っではいけないことなんでしょうか？

「リナ？ メイドさんがお昼出来たって」

「おねえちゃん！」

「とつとと、リナ、いきなり体当たりはよくない」

「ん、これは愛情表現なの」

「こんな愛情表現は、見たことも聞いたこともないわよ」

飽きれながらも、私にやさしい言葉を掛けてくれるねえさま

おねえちゃんが、声を掛けてくれると胸がいつぱいになる

私は、おねえちゃんがよくおねえちゃん自身に言っている、シスコ

ンってやつなんだろうか？

やさしく手をつないで、私を引っ張って行ってくれるおねえちゃんを見て、大好きと言うのと別に、憧れを抱いているのだと思う。おねえちゃん？ もし、もしね。この国から結婚するためにいちやっても、私我慢するから、我慢してみせるから。

どうか、ずっと、私に大好きなおねえちゃんできてください。

姉様は、変わった方だ

王族の娘らしくない？ と、言った方がいいのかもしれない
姉様は、ご自分の世話役や護衛と言った、重要な仕事を長年の付き合いであるソフィア姉様にすべて任せている。
普通の王族の娘なら考えられないことだ。

前に父上に連れられて、ルデリア王国と言う国に行ったことがあった。
た。

そこで、第一王女のイルレーナ姫と呼ばれる姫に出会った

最初は淑女の様に、お淑やかで落ち着きのあるお姫様で好感を持た
しかし、父上とルデリアの国王が別室に移動すると、それまでの行
動がすべて嘘と言ったように態度を180度一片させて変わった。
俺を見る目が、まさに下の物を見るような目で見てきて、正女が、
一時期苦手になった

姉様は、そんな奴とは違い、まあはっきり言えば裏表がない人で、

非常に話しやすく楽しめる人だ。

まだ12歳だけど、結婚するなら彼女のよような性格の人がいい
つまり、姉様は俺の………好みの女性だったりする

別にシスコン（姉様がよくご自身に使っている言葉）じゃ、ないけど！！

ソフィア姉様も含め、彼女達には幸せになってもらいたい
アデルの王子とやらは、どんな性格なんだろう？

姉様を選んだ場合、まずそのなんだっけ？【無表情王子】の顔と性格を見て、姉様と釣り合うか俺が見てやる！！

だからさ、姉様。もし結婚することになったんだったらさ、幸せになっってくれよな

思い

彼女はだれですか？

あれから三日の月日が流れた
短い時間のなかで、その言葉が私の頭の中で何回もリピートされていく

あの、呆然としたような雰囲気を出していた彼
いままで見たことがなかったくらいに、呆然としていた

そして、焦ったソフィアが、つけてしまったリン

さて………私は今度から一人二役をあの国で演じなくてはいけなくなってしまうたわけで………

偶然にしては、出来すぎている私たちの再会だった
手に持っているお土産ワインの包を落とさないように、しっかり握り締めながら二人の会話をただ聞いていた

「リン？ 侍女ですか？」

「はい、そうです」

「だけど、なぜ侍女が来ているのですか？ お迎えにしても邪魔に
しかならないのでは？」

不審そうに聞いてくる第一王子ことヴェザイン様

驚くことに、目の前にいるソフィアが緊張してるっぽい

さつきから、やたらと体が小刻みに動いてるから、見ていてなんかおもしろいかも

「か、彼女は、貴方様がリーナ様を選んだ場合の時のために、次来る時に一緒に来るメイドです。さすがに私一人では、リーナ様のお世話など追いつかないと思ひまして」

「そうか、しかし、今彼女がいるのは何故だ？」

「見学でございます、今のうちからアデルの空気を教えようかと」

「そうか、………まあいい、所でずっと気になっていたんだが、お前たちのメイドと言った言葉は侍女の事なのか？」

「はい？ えっと、まあそうですね。ほぼそんなようなものです。

最近大陸中にある喫茶店が大流行しているのは、ご存知ですか？」

はい、ご存知ですとも

広めたのは、私ですから！！

「そういえば、先ほど妙な喫茶店を見かけたな」

「ええ、多分そこが今流行の喫茶店です。その喫茶店の発想を広めた者が、我が王国の者なんですよ」

「そうだったのか、いや俺はあまり若者の流行りという物がよく分からないからな」

「流行は大切ですよ？」

気になっている女の子とも会話も展開

しやすいですし」

「！？」

「あ、そういえば、ヴェザイン王子様はあまりリーナ様と話せてませんでしたよね、どうしてでしょうか？」

何故か最終的には、分かれる最後までガラス細工店の人混みの中で、

ソフィアの王子流行に乗ろう講座なんてものが開かれていた

と、まあそんなわけで、………今度から、リーだけでなく、リンも参加しなくてはならなくなってしまうた
ホント、何やってるんだろうなあ私って

「リーナ様、荷物は持ちましたか？」

「うん、今度は、いろいろ持っていていかなくはいけないから大変ね」
「そうですね」

月日は、ヴェザイン様と居た一週間と違い、あっという間に流れていった

国に戻って、4日後の日にアデル帝国から、正式な妃候補になったという手紙が来た

その日は、お父様とお母様、そして弟妹達も喜んでくれた

「準備は出来ましたか？」

自分のあと最低でも1年は帰ることのできない部屋を見渡す
扉の前では、メイド服姿のソフィアが立っていた
荷物は、すでに馬車へと積み込んでいるそうだ

「お別れだね」

長年連れ添ってきた部屋から一步一步出入り口に向けて歩く

「もう、なにも持っていないかなくても？」

「……………」

扉の前に立つ

「そう、じゃっ行きましようか？」

「行くつもりじゃない!!」

今思えば、自分はバカだった

容姿にばかり気にかかり、自分の、親から初めてもらった物を裏切るかの様に一瞬にして、親にも見せることなくすり替えた

自分勝手なことで、親からもらった物を否定した

よくよく考えると、そう思えてきた

私の変身能力を欲しがったのは、ただ単に自分の危険を回避する、そんなことのためではなかった。

私が衣佐奈と言う、一人の女性に執着していた、だから欲しかった

また、自分を取り戻せるような

また、時間を戻せるような

また、その顔で笑えるような

そんな気持ちだった。

さて、どうすればいい？

今度からは、偽りの自分だけでなく、この世界での本物の自分の姿で人前に出なくてはいけない

さて、どうすればいい？

私は、いつまで【偽り姫】をやるのだろうか？

また、ここに来てしまいましたわね
何がよかったのかは分からないけど、何故かまたこの国に来てしま
った

私のこれまでの態度では、もう正式妃候補になることなどないと思
っていた
妃候補などなるつもりもなかったし、アレイスがいたから他の人
と結婚なんて……
二日前にわが国に、アデイル帝国から正規の妃候補になったなどと
伝えてきた

母や父は多いに喜んだが、私は………

姫、もし、もし妃にならずにこの国に戻った、その時は

「……アレイス」

大丈夫だよ、私は嫌な奴だから国には戻れる
だから、少しまっていてね
愛しているわアレイス

エスリナ姫、ご到着いたしました

「ええ、今出るわ」

これは、私に課せられた試練なのよ

何故か、国民全員に盛大な拍手で送り出された私、リーナ
馬車で宮殿をたつたら、その先には列を作つてまるで私を祝福する
ような国民がいた

いや、まって!? これじゃあもし私が妃になれなかったら恥じゃ
ん!!!

なに、国民の皆さん。私に変な期待を押し付けないで!!

「諦めなさいリーナ、ウチの国民はこういうイベントが好きなのよ」
「変な国民だ」

「アンタもその国民の一人だけね」

失敬な! 私は変な奴じゃないわ

久しぶりの私の部屋で過ごした七日間は、思っていたより早く終わり
でも、充実的な七日間だった

妹とハイキングに出かけたり、弟と釣りを楽しんだり

庶民的な弟妹だと、最近思うようになった

でも、最後には送り出すときドレスを着飾っていた妹を見たときに
彼女も王族なんだなと実感した

姉様、いつていらっしやい

姉様、妃になってこいよ、頑張れよ

最後に、妹が姉様と言ったことに驚いた

多分妹としての最大級のお別れの気持ちだったんだらう

一年は帰ることのできない、会うことのできない人たちのお別れは
意外と早かった

「なんか、さびしい？ 悲しい？ どっちだろうな」
「両方なんじゃない、泣きそうな顔してるもの」

そっか、寂しいし、悲しいんだ

一年は会えないんだもんね

それに妃になっちゃったら、もう公の場でしか会うことはかなわなくなるんだもんね

「胸を張りなさいリーナ、あなたは弟妹たちの立派な姿を見たんでしょう？」

「う……ん」

だよね、それに王族なら覚悟は出来ていなくちゃいけないんだ

家族と離れなくてはいけないんだから、覚悟を決めたはずだったんだでも、どうしようもなく目からは涙がこぼれていく

二週間前とは全然立場も何もかもが変わってしまった

私は正式な妃候補となってしまうたんだから

ある部屋の一室では、そわそわと体を動かして部屋中を歩き回っている者がいた

誰をかくそう、アデイル帝国の【無表情王子】ことヴェザイン第一王子であった

ど、どうするか……

この一週間若者の流行などを研究に研究して話題を持つことには成功した

だけど、俺のこの無愛想な顔ではリーナは、引いてしまつかもしれない

何で、俺はこの七日間の間に表情の作り方を研究しなかったんだ!!

彼は苦悩していた、顔はいつものような無表情なのに

あ、兄貴が苦悩している

分かるんですか!?

ああ、兄貴の回りにどうしようオーラがでてるじゃないか

すいません、俺にはまったく見えませんよ。超能力ではないですかそれ?

まじか、なにかかっこいいな、それ

そして、そんな彼をドアを少し開けて見ている二人組がいた端から見たら、ただの変質者のような連中だが、その正体は

しかし、ザリーア様。なぜ我々はこの様に覗き見しなくてはいけないんですか

いやだつて、なんかこの一週間兄貴の回りに近づいたら消すオーラが出てたじゃん?なんかまだ出ていそうで怖いんだよ

いや、知りませんよそんなこと

「でもさ、兄貴があんなに誰かを思ってる。うれしいよな、兄貴が変わっていくのはさあ」

「……………そうですね」

二度目のパーティー

その日、私が王宮に着いて離宮に入ると離宮にいるメイドさんから夜に歓迎パーティーがあることの知らせを持ってきた

どうやら正式な妃候補のお披露目式だそうで、四大公爵家や国王・皇帝そして王子二人参席で行われるらしい

でも、今度は警備体制とか大丈夫なんでしょね

この前なんて、国王様と皇帝さんが居ても襲われ？だからねえ

と、思ったら

どうやら今度はソフィアも出席オツケーになった

なんでも、ヴェザイン王子が国王様に侍女出席を要請したんだそう

ソフィア曰く

強い者は、相手がどのくらい強いのか分かるそうで、ソフィアの強さも感じ取っているんだそう

侍女同席は、他国の者と言つこともあつてリスクも高いんだと思うけど、そこら辺は考えてると思うけどね

だって、侍女に扮して敵が紛れ込んでいましたなんてシャレにならないし

ほんと、ソフィアがいるから今回は安心して出れそう

だけど、そこで問題が発生してしまつた

なんと、王子の要請では連れてきた侍女すべて出席の元なんだそう

「どうしますか？ リンと言う女性が来ていることも言ってますけど」

「うっ」

つまり、そういうことになってしまっている

リンとは、ソフィアが勝手に決めてしまった、この世界の私の素顔だっったりする人物の名前だ

さらにまずいことに、前にアデイルに帰国の最に私の素顔がヴェザイン様に見られてしまい、あまつさえ次はくるなどと言ってしまったのだ

もし、来ていなかったら、なぜこの前いたかなど追求されてしまう恐れがある

もしそうなればスパイ容疑にはかけられるかもしれない

いや、その確率は低いだろうとは思っけどヴェザイン様に疑われるかもしれないかもだし

それに、もしリンって子はどうしたのか？なんて言われたら、何も言えませんよ私

「その前に、王子があなたのことを報告しているのかも分からないのですけどね。王子が報告していないのなら他にやりようがあるんですが」

なにやら、ソフィアが隣で独り言を言っている

一室には、数名の仮面をかぶった者が数人いた

彼らはルデリアから来た暗殺部隊カルディナ

主に暗闇からの魔法攻撃で相手をなんの痕跡もなく消し去る暗殺のエキスパート

「主、今夜行われるパーティーで、やりましようか？」

一人の大柄の者が、膝を床に着きゆっくりと聞いてくる

その者の前には椅子に座っている一人の女性がいた

部屋が暗い為に分かり辛いのが、長い金髪と青白い目を持つ身長が高め美女と言ってもいいほどの人だ

「まだよ、まだ時期ではない」

その顔に似合わず、声は低い目は細目になって見た感じとても怖い
その女性の隣には彼女の侍女が彼らの様子を見守っていた

「では……」

「今やってしまえば、あの子に地獄を見せられないでしょ？ 私はね、
あの方に近づいた馬鹿な子に最高の苦しみを味合わせたいのよ」

まるで、それも当然とばかりに言う

彼女はイルレーナールデリア

アデイルとは、親睦が深い国の姫

古くからヴェザインとの交流があった姫

（ヴェザイン様、あなたは私のものですかね？）

ただ、彼女はすこし壊れた人間だったのだ

そう、たとえ人を殺すことになってもためらうことのしないほどに
……

エスリナ姫の事情 1

意味が分からないのですが、私ことリーナは前回同様にあるお姫様に絡まれてしまっています

確か彼女は……え、エストーン？いやいやエスリナだったかしら？

「ちよつと、聞いてますの？」

「あ、はいはい。何でしょうかエス……さん」

「サスペンス小説の被害者役みたいな名前ではありません！！エスリナですわ」

そ、そうでした

さっき思い出したのに声に出して言えなかつたんですよ

でもですねえ？ 一度だけしか接触したことのない相手の名前なんて早々覚えられるなんて不可能なんですよ

いや、私が薄情ものとかではなくてね？

と、いうか 嫌味を言われた相手の名前なんてあまり覚えたくもないですし

「まあ、いいですわ。私あの【悲劇の王女】と名高い、あなたの顔をもう一度見たかったですし」

「はあ……」

この人、失礼なんじゃない？

顔とか胸とかすっごいのに勿体ないなあ

と、そんな目で見ていたからだろうか、彼女エスリナは突然顔を赤面し

「な、なんですの！！ その卑猥な目わ」

「ま、まって！！ 私はただ胸とか胸とか顔とかがいいな

なんてしか思っただけから」

「思いつきり視姦ですわ!!」

なんだ？ 話が変な方向に進みつつあるんですけど!!

いきなり絡んできて、いきなり視姦してるだなんて言われたよ

この人何がしたいのかな？ せつかくのパーティーなんだから私じやなくてヴェザイン様と話せばいいのに

夕方ごろに、パーティーは行われた

前回の様に大きな会場ではなく、30人弱が入れるほどの大きさの会場だ

ソフィアは、前回の遅れを気にしていたのか、今回は早めの準備で誰よりも早く入場することができた

だけど、人数がそろうに連れて、何故か後ろからソフィアの殺気が流れてくる

怖いから止めてほしい、多分まわりを警戒してくれているのだろうとは思っけど……

なにせ、今回私は正妃候補と呼ばれる肩書きでここにいるのだから

“二帰制度”などと呼ばれる制度について簡単に説明しようかと思う

この制度は、昔から大陸中の国がやっていた王子または国王の妃を決める時に使われていた制度で内容は、王子または国王が気に入った者を妃にするため物だ、しかしこの制度の本質は妃の安全を確保するための物だったりする

“妃候補”と言う物は、国によって大差はあるけど、一回そのような物になると王族に近い者として、大きな力となる

それは、お金と権力と言う二つの物にも当てはまってくるため、妃

候補の娘は他の貴族達の権力の餌食となってしまう事が多かったらしい

そこで以前妃を決める時には”二帰制度”と呼ばれる物を使っていた
仮妃候補を最初に選抜し、その中から王族が気に入った者を選抜に
秘密裏に正規に妃候補を決定する

しかし、秘密と言うのはどこかしら漏れてしまうものだ
そこで、この制度を執行するのは最高権力者となっている
そのため、選抜された妃候補は他の貴族達には知られることはなく
行われる

ついでに言うと、仮妃候補から妃候補を探そうとすると、重い罰
または爵位剥奪などの罰に問われる

だけど、この制度には欠点があったりして
その守ろうとした正規の妃候補が、「私は 国の正妃候補でした」
と、言ってしまったらすべての正妃候補の人物を割り出されてしま
うことになりかねない

世の中には、権力を欲する女性もたくさんいると言うことだ
実際、この制度をすべての国が行っていた時に、ある国で公爵家の
令嬢が発言してしまったことがあり、その令嬢がすべての正妃候補
の名前まで話してしまった事件があった

そして、制度の脆さに気がついた国は、次々と廃止にしていった

今、大陸で二帰制度を使っているのはこのアデイル帝国だけらしい
しかしそう考えると、私の国は大々的に私が正妃候補となったこと
を言ってしまうているわけだからアデイル帝国は完全にこの”二帰
制度”を使っているわけではないということなんだろう
だけど、妃が決まるまで四大公以外の貴族は妃候補に近づくことは
してはいけならしいし

今回の妃候補はすべて他国の姫だからアデイルの貴族とて容易に近

づくことは出来ないのを計算の上で、まだこの制度を使っているってことだと思っ

さあ、話を戻そう

今この部屋にいるのは、妃候補にそのメイドを除き、国王、皇帝、王子二人に四大公のみ

20強はいるけど、おも苦しい雰囲気を出している
そんななか、私は目の前にいるエスリナ姫に捕まってしまったと言
うわけだ

ついでに、リンについては、一人二役はまあ無理だと判断した私は、
開き直りソフィアにもし「もう一人の侍女はどうした？」と、聞か
れた場合助けてもらおう事にした

ソフィアは、言い訳？を作るのも得意なんだ
今のところ、誰からも何も言われていないので大丈夫だろう
今の難関はこの、目の前にいるエスリナ姫だ

「で？エスリナ様は、ご自分が言う視姦してくる者にどのような
ご用件があるのでしょうか？ ないのでしたら私は失礼します」

「私もそうさせてもらおうかしら」
なかなかどうして

やはりと言うか、ライバル同士は仲良くなれないんでしょうか
エスリナ姫は、ふん！とお決まりのような台詞を吐いて私から離れ
て言った

「なんだかなあ」

「ですねえ」

後ろのソフィアも同じ感想を持った様だ

しかし、いきなり言葉を後ろからさりげなく言われると心臓に悪い
「ですが、エスリナ様は何やらおかしな方ですねえ、侍女が誰も
いませんよ」

「そうなんだよね、私もあれ？って思ったけど、なんか侍女さん達は堂々とご飯食べちゃってるし」

侍女って普通は、主の後ろに居るものなのにねえ

「まあ、いいか。突然だけどソフィア……そろそろ食べていいよね？ お腹空いた」

「せめてヴェザイン王子には何か一言でも言いましょよ、ほらなんかずつと視線がこちらを向いてるんですから」

「……うん」

うん、そうなんだ

目が、彼のヴェザイン様の視線が痛いほど伝わってくる

でも、行きたくても足がなかなか前に出ないんです、あの美形顔はダメなのよ！！

「伝わってきますよ、「早く来てほしい」ってなんか伝わってきますよ」

「いや、まって。あと少し」

せめて、あと心の準備ができるまで

幸い、だれも彼とは話してはいないし行こうと思えばいけるけど
いったら絶対に注目的になるじゃないですか！！

エスリナ姫の事情 2

これは、ある一国の王女に起こった、いえ起こっている話です

しかし、それを言う前に知っておかなければいけない言葉があります
みなさんは知っているでしょうか？ 『一人ぼっちの側室姫』と言
う言葉

そのある一国の王女につけられたあだ名と呼ぶには少しひどい名前
です

王女は、何も悪いことはしていませんでした、ただ生まれてすぐす
くと育っている子供

笑顔を見せればそれはそれはかわいらしい普通の子供

しかし、側室のお姫様でした

王女ということは、親は国王な訳です、その王女の母親は正室の王
妃ではなく側室だっただけのことです

国王には、5人の子供がいました。その内上の4人は王子で下が
王女

しかし唯一違うのは性別だけではありません、4人の王子は正室の
子で1人の王女は側室の子です

かなしい事に、そこでまず王女の苦悩の日々は始まりを継げること
になりました

側室、聞き手としては国王の近しい者の1人で高貴な存在なのでし
よう

しかし、側室いえ国という枠組みをとってしまったらそれはタダの
アイジンでしかなくなりませ

そしてそのアイジンの子供が王女だったわけです、いえ王女しか居
なかった訳です

側室の姫、普通は正室の子には劣るにせよ国王の子である限りは優

遇されてもいい存在です

しかし、王女は優遇させるどころか王宮の嫌われ者でした理由？ 簡単です、側室の姫を正室の王子達が認めなかったからですだってそうでしょう？ 側室の子供は1人しかいないんだから異母兄弟なんて嫌だったんですよ
悲しい事です、さらに悲しいのは王女には守ってくれる方がいなかったことです

側室の姫の母親は彼女を生んでからすぐに毒殺されてしまったんですまさに、王女にとっては敵は多く味方はいない状態でした
王女は怯えながら15年もの歳月を生きることになります
そう、15年間です

エスリナ姫の怒涛の言葉攻撃を耐えきった私は、ただいま第二の難関に突入しようとしています

さて皆様、私の目の前に見えるのは帝国でも名高い『無表情王子』のヴェザイン第一王子様

なにかと、あの一週間の間に友好関係に発展？したらしい間柄ですリンと言うメイドについて聞かれたくないからできれば、彼とは話したくなかったんだけど

彼の目が私をロックオンしてるんですからしかたがない
とりあえずそれとなく近づき声をかけた

「お久しぶりですね、ヴェザイン様」

「ああ、一週間ぶりだな。家族との再会はどうだった？」

「はい、有意義なものでしたわ。お忍びで山にピクニックにいたり弟とつりをしたりしました」

久しぶりと言っても、あの時はたった一週間の別れだったけどね

「ほう？ リーナはつりが出きるのか？ と言うことは、もしかすると針に虫を通すのも自分であるのかな？」

「虫ですか？ 私はルアーを使うのでそういうのはしたことがないですね。でも虫だったらミミズとかですか？」

「ああ、それ以外にもあったが忘れた。でも何よりもあなたがよい一週間を過ごされたのかと思うと安心したよ」

「まあ、うれしいことを言ってくれますね」

「そうか？ 普通に思ってることを言ってるんだがな」

「そうでしょうか、一週間前に比べると、なんだか……（変わりすぎじゃない！？ なんだか話しやすいんですけどなにがあったの！？ 会話の勉強でもしたの？）話安いです」

「そうか？（よっしゃああ、なんだか分からないが成功したみたいだ！！感謝するぞカサリア王国の何とかって作家よ）」

この一週間、ヴェザインは雑誌を含め会話上達の為に小説を読み漁った

その中でも、カサリア王国でいま注目の覆面作家の小説を読み漁っていた

作者が誰とは知らずに……

「でもあれですね、会話が成り立ってうれしいカモですね」

「だな、この一週間で言葉の固さも抜けた気がする、これもあの小説「燃える英雄」のお陰だよ、リーナはしってるかな？ 今売れ出している作家何だが」

「……………ええ、まあ（それってあの中二丸出しの私の初刊じゃない！？ まって、ヴェザイン様はあんなこっぴどかしい小説を読んだの？ 止めて語らないで恥ずかしいから！！）」

なんだか、言葉がグレードアップしたヴェザイン様を見ることになった私

でも、あれだ。彼がリンの事を言わなくて本当によかった

私ものすごく心配していたんですよ

「そういうば、あの侍女は来ていないのですか？ たしかその侍女が次来ると言っていたんだけどさ」

「は、はい。そのですねあのですね……（HELP！ヘルプミーソフィア！）」

目で合図を送ると、後ろに控えていたソフィアがヴェザイン様に気付かれないように頷く

「ヴェザイン殿下よろしいでしょうか？ この前貴方様に紹介させていただいたリンですが、旅の疲れか馬車に乗ったのも初めてとあって来て早々に熱をだして今回欠席させていただいて折ります」
綺麗な姿勢で、頭を下げるソフィア

「なんだかソフィアの行動の一つ一つが洗礼されていて見ていてとても気持ちがいい気分になる

「そうか、それはしかたがないな、俺も今回思い切って侍女も参加させたが、そういう理由があるならしかたがない。そのリンという侍女にはちゃんと休む様に申しておけ」

「……はい」
「なんだか、侍女にも平等に接するというか心配する態度にすこし感心するなあ

今まで見てきても、平民とかを見下す貴族王族は見てきたけど……うちの叔父もすごかったからなあ

「リーナ、今回はこの辺で失礼する」

「はい、それとあと一年よろしくお願い致します」

「ああ、こちらこそ」

ヴェザイン様はそういうと後ろを向き、他の妃候補の元に行ったこのオアーティーでの王子の仕事は、妃候補の挨拶なんだろうけど、なんで私をまっけたんだろう？ 他の人と同じように来ればいいのに……

「これも、いい前進なんではないでしょうか？」

「前進？」

「ええ、だって待つていたってことはあなたに来てほしかったって事でしょ？ 多分殿下にとってあなたは特別な存在に？ いえ気になっている存在になってるんじゃないですか？」

「ヴェザイン様が？」

「はい、まだ私の憶測でしかないですけどね」

「……………」

「リーナ？」

「ふえ！？ な、何？」

「いえ、なにかボーっとしだしたので声をかけたんですが…………どうしました？」

「…………ん、なんなのかなあ。なんて言うか特別？ ってうれしいね」

「はい？」

よくわかんないけどさあ、ヴェザイン様が少しでも私に気にかけてるんだなって知ってなんかうれしい？ 気持ちになってるんだ私彼の言動・行動で私だって彼が私を見てるんだって分かった

なんだろうっか？ 無性にうれしい気持ちになってしまったんだ

エスリナ姫の事情 3 (前書き)

多分あと数話は、このタイトルが続きます

エスリナ姫の事情 3

「もし、あなたが一人で越えられない壁に当たったとき、わたくしをお呼びください。必ずやあなたの助けになるでしょう」

「ほんとう？」

「ええ、本当ですよ」

彼は、笑顔で私にそういつたのだ

まだ、私が10歳になったばかりの頃

母さまからも父上からも兄さまたちからも嫌われていた、そんな中でも、ただ一人私に手を差し伸べてくれた彼

その時の私は、人を疑うことしかできなかったから、彼を信じるのに3年掛かってしまった

しかし、今思えばあの頃の私がかここまで彼に気を許せるようになったのは、ある意味奇跡かもしれない

それは、彼の根気と信念が伝わってきたからであると思う

私にとって次第に彼に恋心を抱いたことはまさに必然だったと思う

でも、私は最後の最後で私を嫌っていた善の家族から15年間貯めていた幸運を奪い去ってきた

今まで私に見向きもせず、私が婚約をしているはずなのにそれすらも無視し、ある日突然彼との婚約破棄を言い渡された

何が何だか分からずにただ呆然としていた私に、母様は私に大国の王妃になれと言う

冗談じゃない！！と、人生で最初に親いや義母さまに刃向かった私

「側室の姫が私に刃向かうんじゃないわよ」

彼女のその言葉に、私は動けなくなってしまう

嫌われているとは分かっていて、避けられて毎日睨まれているも分かっていて

でも、直に言われた言葉は私の心を抉り悲しみでいっぱいになっても、その悲しみを分かち合ってくれるはずの彼は、私の隣にはいない

私は、数日後に無理やり荷物をまとめさせられ数人の侍女と共に馬車に乗った

数日間呆然としていた私だったが彼からこっそりと会うことが出来たのはうれしかった

いや、そこまでして会いにきてくれた彼が、私を本当に愛してくれていると分かったことが一番うれしかった

『もし、もしあなたが結婚なされなかった場合今度こそあなたを守りましょう。だから……』

やや眉を潜めながら言っている彼に、私は彼の考えていることが理解出来た

彼は、私との婚約破棄に何もできず悔やんでいるのだ

何も力もなく私を守れなかった自分を悔いているのだ……

こんな私にそんな感情を持ってくれる、それがともうれしかっただから答えた

『はい、……大丈夫です、私は大丈夫です』

だから、あなたも笑ってください
私はあなたのパートナーです、だから笑ってください

一緒に来た侍女は、公爵令嬢や地位の高い貴族の娘が来ていた
彼女達は、側近の娘の私をバカにしているらしく仮妃候補期間中一度も侍女としての仕事をしてはくれなかった
服はもちろんの事、食事もすべて自分で取りに行く
でも、この行動は日常的に行っていたので慣れっこになってしまっている

しかし、何故側室の姫で一人だけの側室の姫だからと言ってこんな態度が他の王族と違うのか？
それは、私の国の習わしにある
私の国は、多重婚や愛人は法的に違反で犯罪
国民では、愛人を持っている男は不潔とされ女は忌み嫌われ娘はそんな二人の象徴で得に好かれない存在

愛人つまり側室を持つことが出来るのは国王ただ一人
表では、側室で子を儲けても何も言われないが裏では嫌われ者となる
王は、子を作らねばならないためにそこまで言われないが、妻がいるのも関わらずその男に言い寄ったとされる女と子はあまりいい印象を持たれない
だから、私は国民から「一人ぼっちの側室姫」などと呼ばれているのだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9376t/>

無表情王子と妃候補の偽り姫

2011年12月3日23時52分発行